

人間文化研究機構 広領域連携型基幹研究プロジェクト
「日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築」ブックレット

新しい地域文化研究の 可能性を求めて

2018.2
Vol.3

ことばは文化の源

人間文化研究機構 国立国語研究所
木部暢子・麻生玲子 編



表紙写真説明

写真は、宮崎県 東臼杵郡 椎葉村 下松尾地区にある棚田です。その美しさから「仙人の棚田」や「椎葉のマチュピチュ」とも呼ばれています。椎葉村は、九州のほぼ中央に位置しています。ここには平家の一門が都から逃れ、隠れ住んだ地であるという伝説もあります。

この地域は深い山に囲まれ、主要な交通拠点からは概ね車で2時間程度かかります。それ故でしょうか、美しい自然や昔から続く独自の生活文化が色濃く残っています。

方言にもその傾向が色濃く見られます。この椎葉村方言には、集落ごとの方言差が大きいという特色があります。これもまた、この地特有の険しい地形によるのかもしれませんが。

椎葉村方言も消滅の危機に瀕した言語の一つです。国立国語研究所では平成26年から椎葉村で方言調査を行なっています。

(文：麻生玲子、写真：原田走一郎)

新しい地域文化研究の 可能性を求めて

2018.2
Vol.3

ことばは文化の源

人間文化研究機構 国立国語研究所
木部暢子・麻生玲子 編

人間文化研究機構広領域連携型基幹研究プロジェクト

「日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築」

新しい地域文化研究の可能性を求めて

ことばは文化の源

木部 暢子 2

対談1 ユンヌフトウバ（与論のことば）を子どもたちに教える

菊 秀史 6

対談2 ユンヌフトウバ（与論のことば）で劇をする

原田 誠一郎 24

対談3 若い世代から見たユンヌフトウバ（与論のことば）

菊 凜太郎 38

方言だから伝わることを考えて

白岩 広行 54

方言で「出雲」を伝える

友定 賢治 66

地域言語コミュニティと協働する消滅危機言語研究

山田 真寛 76

ことばは文化の源

「方言の記録と継承による地域文化の再構築」ユニットからの提言

木部 暢子

いま、世界中で力の弱い言語が衰退し、力の強い言語にとって替わられるという現象が起きています。アメリカの言語学者マイケル・クラウスによると、現在、世界に存在する約六千の言語のうち、半数が一〇〇年のうちに確実に消滅してなくなり、最悪の場合、言語の数は一〇分の一、あるいは二〇分の一にまで減少するといえます（注1）。このような状況に警鐘を鳴らし、言語の多様性を守ろうと訴えたのが、二〇〇九年のユネスコのAtlas of the World's Languages in Danger（世界消滅危機言語地図）の発表です。

この地図では、約二五〇〇の言語が消滅の危機にある言語として取り上げられています。その中には、日本で話されている八つの言語も含まれています。アイヌ語、八丈語、奄美語、国頭語、沖縄語、宮古語、八重山語、与那国語の八つです。しかし、消滅の危機にあるのは、この八つだけではありません。多くの方言がいま急速に衰退し、もしかしたら消滅してしまうかもしれない状況にあります。本ユニットでは、このような言語や方言をできるだけ多く記録し、後世に残すこと、できるなら消滅させずに次の世代へ引き継いでいくこと、さらに、このような活動を地域

の人と一緒に言うことで、地域の活性化を進めていくことを目標として活動しています。

ところで、このような活動をしていると、よく、次のようなことばを聞きます。

— 方言がなくなるのは、時代の流れだから、残そうとしても無理だ。

— 方言で話しても通じないから、標準語で話す方がいい。

— 子どもには、方言よりも英語を教えた方がいい。

しかし、そもそもなぜ、言語や方言がこれほど多様になったのか、考えてみてください。おそらく、そこに住む人たちが毎日の生活の中で、いろいろなことをどう表現するか考え、もっとも適した表現を選んでいった、その結果が言語や方言の多様性ではないかと思えます。各地には方言でしか言い表せないことがたくさんあります。たとえば、沖縄本島の西原地区には「マフツクアー アチサクトウ ティーダ ネーラチカラ ハルカイ イケー（真夏の日は暑いので太陽をなえさせてから畑に行きなさい）」という言い方があります（注2）。ここには照りつける「ティーダ（太陽）」への恨みの気持ちは少しもありません。あるのは、「太陽の気持ちを静めてから」といった畏敬の念や、友人をなだめるような親しみの気持ちです。「日が弱くなってから」では言い表せない、「ティーダ」と沖縄の人たちとの関係が、ここには込められているのです。

ことばは文化の源です。地域のことばを守る意味は、ここにあるのです。

1 注

マイケル・クラウス（二〇〇二）「言語の大量消滅と記録―時間との競争」宮岡伯人、崎山理編『消滅の危機に瀕した世界の言語―ことばと文化の多様性を守るために』（渡辺己、笹間史子監訳）明石書店

2

狩俣繁久（二〇一一年）「琉球方言から考える言語多様性と文化多様性の危機」INITIALフォーラムシリーズ第3回『日本の方言の多様性を守るために』

与論のこころみ



対談1

ユニヌフトウバ（与論のことば）を子どもたちに教える

与論民俗村村長 菊 秀史さん

ユニヌフトウバを子どもたちに教えるまで

木部 今日は与論における方言の状況について伺いたいと思います。

菊秀史 はい。よろしくお願ひします。

木部 はじめに、菊さんがユニヌフトウバを子どもたちに伝える活動を始めたきっかけを教えてください。

菊秀史 きっかけはですね、この「民俗村」は、設立当初は「与論民具館」だったんです。それを私が継いで、名称を「与論民俗村」に変えたのですが。民具館を始めたときに、母

は、民具が使われなくなって消えると、その方言名も消えることに気付いて方言も集め始めたんです。それが『与論方言集』となり、『与論方言辞典』という形で出版されたんですが、私も語彙の収集を手伝ったりしている中で、方言って大事だというふうに思ったんですね。ただその当時は、それは単に記録保存ということだったんです。私が結婚して子どもが生まれたときに、私はまだ現役でこうして日常で普通に方言を話しているではないか。だから、なくなるのを前提に、『辞典』を書いておけばいいというのではだめだと



思っただんです。母のやっていることは大事なんだけど、私たちが日常で使っていることばを子どもたちに伝えていけば、これから先、生きた形で伝えることができるんだと。

ところが、周りを見ると、まったくそうじゃないんですね。「方言なんてどうでもいいんじゃないの」という感じになっていて。それで、自分がやるしかないなと思って始めたのがきっかけですね。まずは、自分の子どもだけでもと、それが始まりです。

木部 それは、いつごろですか？

菊秀史 ちょうど二〇年ぐらい前じゃなかったでしょうか。

木部 二〇年ぐらい前ですか。そのころ、やっぱり与論の人たちはもう方言なんかはいらないうちでなくなったんですか？

菊秀史 そうですね。関心事じゃなかったですね。思い立ったのはもうちょっと前です。町政懇談会というのが年に一度あるんです。今は校区ごとに分かれて開催していますけど、当時は、中央公民館に全町民を集めて、町政に対して何か要望はないですか、意見はないですかという会があったんですよ。

木部 はい。

菊秀史 町の人にも私の思いを聞いてほしいということ、そこで、「与論のことばがどんどん消えている。ことばというのは本来、家庭で、親が中心になって教えていくものだ

というのは、重々分かっていきますが、ただ、核家族化したり昔と状況が変わったりして、家庭で教えていくっていう状況にはありません。昔、方言は使わないようにしようということをやったわけですから、逆に、これからは、学校でも方言を教えないといけないんじゃないですか」と言ったら、「あなたの言うことはもつともである。方言は大事にしないといけない。ただ、学校は方言を教えるところじゃありません。ちゃんとした学力を付けさせるところですから、方言はやっぱり家庭で親が責任を持って教えないといけませんよ」っていう話だったんですね。「それはよく分かりますが、それができないので、こうして今、私が話してるんじゃないですか。じゃあ、このままなくなってもいいってんですか」と言ったんですが、もう、そこで終わったんですね。

木部 そのころは、学校では方言は教えないというふうに言われたんですね。

菊秀史 そうですね。

木部 学校で方言の指導を始めるようになったのは、校長先生が代わったから？



菊秀史

いや、そうではなくて、自分の子どもたちだけにでも、と思つて教えるようにしていたんですね。子どもたちも方言を聞く耳は持っている。ただ、なかなか手だてが分からなくてもやもやしているときに、この集落の子ども会、保護者の子ども育成会という組織があるんですけど、その会長を引き受けてくれないかという話が来たんです。いつもだったら断るんですけど、直感的にこれはちょうどいいチャンスかもしれないと思つて、「いいよ、やるよ」と言つてすぐに引き受けたんですよ。そのときに勉強会をしようということですね、子どもたちを集めて。小学生から中学三年生までなんですけど。

木部

ここ（民俗村）で開いたんですか？

菊秀史

いや、公民館、東区。そこで月に一回子どもたちを集めて、ユンヌフトゥバを勉強しようということ。

木部

子どもたちの反応はどうでした？

菊秀史

まじめに授業をすると、それはつまらないわけですから、カルタとか尻とり、ゲームですね。あとは、必ずお菓子が付きますのでね。ちよつとおまけが付きますから。

木部

お菓子で、カルタとか遊びとかを。

菊秀史

やっぱり遊びがないと、子どもたちの場合は。与論のことばって大事なんだと言つても分からないですからね。

木部

周りの大人はどうでした？ 子ども会やって。

菊秀史

周りは、まあ、最初、酒飲みなんかの席では「何をやっているの」とか、「せつかく教室をするんだつたらパソコンとか、英会話とか、そっちの方が大事だ」、「方言なんか何のためになるの」という意見はちよい。

木部

言われました？

菊秀史 言われましたね。でも無視して、「我が道に行く」でやっているうちに、小学校に山校長先生（現与論町長）が赴任したので、そこに掛け合って。

ちようど土曜日が月二回休みに入っていましたので、「月二回の土曜休みに学校の図書室を開放していただけませんか。そこで方言の授業をやりたいんです」と言ったら、「それはいいことだからぜひやってください」ということで、そこで学校とかかわるようになったんですね。

ところが、そこに来る子は、一回目は来るけど二回目は来なかったり、二回目、三回目に初めて来たり、そういう子が一緒になるわけですね。それで、土曜休みの授業は一学期だけで打ち切って、二学期から「総合学習の時間に授業をさせてもらえませんか」と申し出て、早速やらせてもらいました。

木部 総合学習の時間に取り入れるって、学校の先生の協力が必要ですよ。そのときは学校の先生に地元出身の方がいらしたんですか？

菊秀史 いや、いませんでしたね。最初は、ほとんど私が授業を受け持つという形でした。最初は全部私が資料を作って、単語とか、あいさつことばとかですね。あとは文型とか、作って。だから先生も一生徒になつて覚えるという形だったな、どっちかといったら。

木部 でもそれができるといふのは、かなり学校の、校長先生の理解があつたからですね。
菊秀史 はい。

木部 ほかのいろいろな学校でもそういう試みをやっていますけど、八丈島なんかでもね。やっぱり先生たちの負担がかなり大きいというようなことを聞きましたね。

菊秀史 いろいろ、難しいんですよ。今度、

英語の授業がまた入ってくるわけでしょう。先生方の負担もありますから。こっちもまたもっと違った形で進めていかないといけないですね。

『ユンヌフトゥバで話そう』の執筆

木部 菊さんが作られた本は、そういう授業のために作られたんですか？

菊秀史 いや、授業のためというよりも、子ども会のとくに、月に一回、資料を書いてやるでしょう。そうすると、やっぱり体系的な資料がないとだめだなと思ったんですよ。場当たり的な資料じゃだめだなと。そうしたら、まずは何を教えればいいんだろうということ、まずはあいさつことばでどうだろう。次に、名詞があつて、動詞があつて、文型も大事だなと思つて。ゼロからのスタートでした

ね。

木部 それはでも、すごいですね。自分が教えるために、自分のために本を作ったということですね。

菊秀史 そうです。地元の人が、地元の若者、子どもに向けていく視点。何か参考書はないだろうかと思つて、沖縄に行つたり、奄美に行つたりして、結構、探したんですよ。そうしたら専門書か、あるいは観光客向けの入門書みたいな感じなんです。地元の人が地元の人向けに、若者、子どもに教えるという視点に立ったのがなくて、これは自分で書くしかないなと思つて。そうしたら、もう怖いもの知らずですね。しゃべれるから書けるかなと思つて、簡単に始めたのが逆によかつたですよ。

木部 ああ。確かにそうですね。大学の先生が書くのはやっぱりちよつと難しすぎる。

分かりやすく書いてないですよ。それとあと観光客がお土産で買うようなのですよね。確かにそうですね。

菊秀史 最初は、まずやっぱりあいさつだろう、次に見てもらうのは名詞だろうなということ。ただ、あいさつことば、または名詞が全部終わってから次の書くんじゃないやなくて、動詞も形容詞も助詞も同時でした。この紙はこつち、この紙はこつちって、分類しながら書き溜めていきました。四冊（『与論の言葉で話そう』一〜四）とも。

木部 ものすごく勉強なさったんじゃないですか？ かなり文法的に。

菊秀史 いやいや。でも、よくメモするんですよ。普段、人と話をしているときに、自分の口から発することばの用法を客観したり、人の独特の言い回しを聞いて、これは直訳すると、こうなるんだけど、共通語でそん

な風に言うだろうかって、気付いたらすぐメモをする。そんな感じですね。

木部 方言をしゃべる人はまだたくさんい



らっしやると思うんだけど、こういうふう
うに方言をまとめることができるという人は
そんなないと思うんですよ。だからこう
いう本を作るといのは素晴らしいと思うん
です。

菊秀史 詳しい人が見たら、「何だ、あなた
の書き方は、これ、全部間違っているし、こ
んな文法はないよ」と言われるかもしれない
けど、いや、現に使っているのだからいいよ
と。

木部 はい。それがとても大事だと思います。

菊秀史 最初は、学校で習う現代文法と古典
文法で説明しないといかんと思っていたんで
すよ、私も。固定観念があつて。でも、それ
で説明できないのは、勝手に作ったらいいか
と思うようになったんです。例えば、出掛け
ようと思っただけで雨が降ってきたので、出掛
けるのをやめたという場面で、「雨が降られ

て、出掛けるのをやめた。」という言い方が
与論にはある。

木部 「雨が降られて」ですか。

菊秀史 共通語で理由を表すのに、「雨が降
られて」といのは、だめですよ。「雨が降つ
たので」と言わなければいけない。これはど
う説明するんだろう。じゃあ、自分で文法を
作ればいいのかという感じで書いていったわけ
ですよ。

木部 それが案外、世界的に、一般的に通用
する文法だったりするんですよ、実は。だか
ら、それを残しておくのが重要なんです。

菊秀史 自分たちが普通に使っているわけだ
からね。まずはそれを書いておけば、後から
そういった文法が説明できるんじゃないか
と。取りあえず書いて、書いたものを出して
おけばいい。後からまたそれを土台にして、
体系をまとめてきれいに整えてくれる人が出

てくるだろうと思って。そういう感じでしたよ。

木部 はい。それは大事ですよ。

菊秀史 取りあえず出さないことには始まらないと思うんですね。しかも早く、一刻も早く。誰からも批判されなくらいに自分が勉強してから出そうと思うと、もうことばがなくなってしまうんですよ。だから分かんるところだけ、書けるところを取りあえず先に書いておけば、誰かこれにまた書き足したり、批判したり、間違いを指摘したりして。そういうものなら自分でも出せるかもしれないと思っただけ。中途半端ながら、出すことに決めたのはそんな気持ちからでしたね。

木部 それは本当に素晴らしいと思いますね。それで、そういう活動に周りの人も賛同するようになってきたと思うんですけれど、それはみんなの考え方が少しずつ変わっ

てきたということなんですか？

菊秀史 変わってきているのは実感しますね。ただ、家庭で前より方言を使っているところまではきていますけど、日常的に方言で話せるようになったというのは、まだありませんね。

いつも思うのは、私は中心になって運動するタイプでもないし、また、してもいけないと思うわけです。そうでないと、「ああ、菊秀史さんにやらせなさいよ」ということになる。一番マイナスなんです。他人ごとになれる。町民全員が方言を自分のことにするためには、私が出過ぎないように、それはいつも心掛けていますね。私が行って話さないといかんという時はやりますけど、ここはもう行かない方がいいという時にはやらない。次の人たちが出てきますから。

木部 そうですね。今、若い人のグループも

できたんですよね。

菊秀史 何人か。まだまだ広げなければなら
ないんですけどね。うちの子どもたちも、同
級生が少しずつ帰ってきたりしているんで、
彼らなんかね、中心になっていってくれん
と困っているんです。

ユンヌフトゥバの将来

木部 ユンヌフトゥバはこれからどういうふう
になりますかね？

菊秀史 いやあ、残したいですね。私は民俗
資料館の経営者ではあるんだけど、こう
いう資料とかいうのは一応残せるんですよ
ね、物は。残すだけでなく、自分でも作った
り使ったりして、技術の継承も同時並行で
やっています。でも、ことばは一度消えたら
終わりです。だから、比重は民俗資料よりも

今はやっぱりことばの継承、生きた形で日常
使う形に戻すというのが私の使命ですね。

木部 そうですね。私も感じるのは、物は一
つでも残るけれども、ことばは、一人じゃだ
めなんですよね。何人もの人が会話しないと
残らない。

菊秀史 今、底辺で方言が大事だというふう
には広がっています。ただ、話せなかった子
が完全に話せるようになったという例は、ま
だないんですよ。なので、一人でもいいから
成功例を出すのが私の今の仕事だと思ってい
ます。

木部 一人、そういう子が出れば、ほかの子
も、あ、自分もそういうふうになりたいとい
うふうに……。

菊秀史 私も、教えるノウハウがちよつと付
きますよね。教える順番とか。ノウハウが分
からないと、テキストを全部覚えなさいだけ

じゃいかんわけだから。

木部 日本でも外国でも、もうなくなっていくものを守る必要があるのかっていう議論がありますよね。ことばは生活の中で使わなきゃ意味がないのだけれど、今は方言を使わなくても今生きていけますよね。標準語があり、英語が、まあ、これから英語が世界の標準語になるんでしょうけど。それなのに、なぜ方言を守る必要があるのかと思っている人は結構多いんですよ。

菊秀史 私はこういう仕事をしているからかもしれないんですけど、昭和三〇年代ごろには、岐阜の白川郷の家なんかも含めて、こんな茅葺きの家はだめなんだ、住みにくい家なんだという風潮があった。今風なおしゃれな家がいい家なんだという価値観でみんなつぶしたわけですよ。ところが、今、民俗村にみえるお客さんは、ああ、こういう家に住みたい



という人が逆に多いんです。

人の豊かさというのは、いわゆる億ションに住む方が幸せなのかと言うと、私はそうは思わないんですよ。やっぱり庭があって、木々があって、鳥がさえずってね。木の枝にブラ

ンコを下げて、こう、庭や家の中を風が抜けるという暮らしは捨てたもんじゃない。マンションよりこつちの方がいい暮らしと思ったりしているんです。だから、人の豊かさとかは、ことばの面から言えば、英語の方がいいんだ、共通語の方がいいんだじゃなくて、英語もこれから必要だし、正しい共通語ももちろん話せないと困るけど、方言を話すこともとても大事なんですよ。自分の生まれ育った根っこのことばですからね。それはいらぬよじゃないんです。ことばは自分自身ですから、ことばを否定するのは、自分自身を否定するのと同じなんです。ユンヌフトゥバも話せる、英語も話せる、それが理想ですね。

木部 理想ですよ。今だんだん価値観が変わってきて、やっぱり方言だとか昔ながらのこういう文化とか建物も。

菊秀史 見直されていますね。

木部 ええ、見直されていますけれども、結局、何か、総論賛成、各論反対みたいな人がほとんどですよ。

菊秀史 ほとんどですね。

木部 それをみんなが実行して……

菊秀史 実行してないですよ。与論方言の復興活動もそうなんです。方言を残すことは大事なんだと思ってるけど、面倒くさいし、いちいち通訳するのが大変だから、大事ななど思っているけど実際に行動に移していかないという人がまだ多いですね。全国的にそうかもしれないけど、実際に行動に移していく人をいかに増やすかですよ。

木部 うん、そうですね。

菊秀史 そのためには、やっぱり成功例をいくつか出すというのが一番、近道でもありません。ああ、やればできるんだって。あんなのだめなんだ。必ずなくなるんだと思っていた

ら、もう、あきらめる、活動をやめる方にいきがちですから。やればできるんだという成功例を出すこと。あとは、やっぱり、教え方ですね。

木部 今、保育園と小学校では、方言を伝える活動をしています。中学校ではどうですか？

菊秀史 中学生には学期に一回、民俗村で講義を行っています。この間、行って講話もしたんですけど。

木部 小学校までは、ほかの県もそうなんですけど、総合学習で組み込むんだけど、中学校になると子どもたちが急に忙しくなって。

菊秀史 忙しいし。また、何というのかな。

照れてというのかなあ。特に小学校五〜六年ぐらいは。

木部 何か。うん。

菊秀史 小学校低学年のころは何でも一生懸命で、子どもらしくやっていたけど、五〜六年になると、何か急に兄ちゃん、姉ちゃんぶるといえるのか。

命で、子どもらしくやっていたけど、五〜六年になると、何か急に兄ちゃん、姉ちゃんぶるといえるのか。

木部 あれは照れですかね。思春期で。

菊秀史 ええ。反応が乗ってこないでしょう。

木部 うん。小学校のときは……

菊秀史 質問すると、小学校のときは、元気で「はいはい」って手を挙げていたのが、五〜六年になると「質問ありませんか」と言ってもしーんとするような感じですね。中学生でも。

木部 それと同じで方言をしゃべるのも何か恥ずかしいというふうになるんですかね。

菊秀史 でも、「紙に知っているユンヌフトゥバを全部書きだしてごらん」というと、最初は、「知りません」と言っていたのが、「じゃあ、家族の名称は何？ お父さんは？」と言ったら、「ああ、アチャ、アンマー」って書け

るんですよ。今度は「身体語彙は何？」と言ったら、「あつ、知ってる。書けるわ、書けるわ」って書いていくの。

木部 知っているんですね。

菊秀史 うん、知っている。頭に入っているんですよ。知っているけれども使っていない。木部 たぶん与論では、もうみんな頭の中に入っていると思うんですよ。

菊秀史 入っている。小学生でも聞いて理解している子は多いです。

木部 あとはそれを使うかどうか。

菊秀史 そうなんですよ。

木部 それは環境が大事なんですな。

菊秀史 方言の方がかっこいいんだとか、恥ずかしくないんだと本人が思える環境ですね。うちの子が今そんな感じかな。今まで「使え使え」と言っても使わなかったけど、今は、与論に帰ってきてからには、使っている。



木部 ああ。そうですか。

菊秀史 そういうようなことが、一刻も早く出てほしいんですよ。若いうちに。

木部 そのためには、もう少し上の世代が方言をもっと使って、ここは方言を使う場なん

だというのを増やしていく。

菊秀史 そうですね。本当に。使う場面を作らないといけないですね。民俗村も。民具だけじゃなくて、言語復興の中心にならないといけないと思っています。

木部 飛行機でも、スチュワードessさんが最近、方言であいさつをするんですよ。那覇の方言なんですけどね。そういうのはどうですか？

菊秀史 ああ、いいと思いますよ。

木部 ああ、いいですか。まだ二〇代のスチュワードessさんだから、伝統的な方言ではないんですけれども、それでも……

菊秀史 それでもやっぱり方言を話しているということになりますからね。きつかけとしては、いいと思いますね。もう今は、島の若者たちも両方使える方がカッコいいみたいない意識が変わりましたね。前は恥ずかしくて、

島外の人がいると聞こえないように方言を話していたんだけど、今はもう全然平気ですもんね。

木部 ほかのところで聞くんですが、若い人が方言をしゃべると、年寄りが「お前の方言は間違っている」とか、「敬語の使い方が間違っている」とか言われて、縮こまってしまつて話せなくなるというんですね。

菊秀史 与論でもそれはあると思います。だから、私もいろいろな場面で、「違うのは当たり前だし、叱らないように。使うだけで偉いと言って褒めてあげてください」と言っているんですけどね。これは大きな問題ですよ。上から「それは間違っている」と言われたら萎縮しますからね。次から使わないようにしようになつちゃうから。

木部 それに方言もだんだん変わってきているわけだから。年配の人が意識を変えないと

いけないということですね。

菊秀史 そうなんです。あと、地区による違いがあるでしょう。

木部 やっぱりと与論の中でも違うんですね。

菊秀史 あります。やっぱり自分たちのことばがいいと思ってるから、いろいろ文句を付けたがるんですよ。だからいつも言います。いろいろな言い方があるんだよ、自分のことばが一番いいというふうに言うのはやめなしよう、と。

木部 そうですね。

菊秀史 小学校で授業するときも、「これは私の言い方だから、皆さんは、自分のお父さん、お母さん、おじいさん、おばあさんのことばを第一に覚えてね」と言っているんですよ。そういうふうにしなないと、「学校で教えられたから、こっちの方がいいんだ」というようになって、各地区の方言がだめになりま

すよね。

木部 そうですね。どうしてもことばになると、自分の価値観というのが出ちゃうんですよ。よね。

菊秀史 そうですね。だからそういう意味で、話している人も勉強が必要だとつくづく思いますよ。

おわりに

木部 最後に菊秀史さんから子どもたちや若い人たちに何かメッセージをお願いします。

菊秀史 ああ、メッセージね。おかげさまで、今、与論には高校まであるんだけど、卒業したら県外に出るわけです。そこで初めて、自分の生まれ育った与論島を振り返ることにするんだけど、自分の島のことは、そして文化、家族の歴史などをしっかり学んで、そ

これから外に出て欲しいと思います。そうしないと、いくら、外に出ていろいろなことが分かっても、自分自身の中身が空っぽじゃ何もならんわけなので。

特にことばは、目には見えないけれど、宝そのものですからね、物よりはことば。自分の先祖が数千年つないできたことばを今、なぐさないで、しっかり今後もユンヌフトウバを覚えて話して行ってほしいと切に願っていますね。

木部 はい。ありがとうございました。

対談2

ユンヌフトウバ（与論のことば）で劇をする

自由人 原田 誠一郎

エプロンシアターのこと

木部 今やっぺいらっしやるのは、方言で『三びきのこぶた』の劇の上演ですか？

原田 はい。エプロンシアターですね。

木部 それはどこでなさっているんですか？

原田 場所はですね、こども園。与論のことども園は四つあります。こども園の行事に合わせて呼んでくれますので。それと小学校。

木部 小学校でも。

原田 この間、中学校のキャンプでもやりました。

木部 子どもたちは、大喜びでしょう？

原田 そうですね。話の筋は分かっているの
で、追いかけては来てくれますね。

木部 エプロンシアターというのは、エプロンをして、エプロンの中に仕掛けがいっぱいあるんですね？

原田 ブタが出てきたり、オオカミが出てきたり、それを与論のことばで。

木部 『三びきのこぶた』を与論のことばで。子どもたちはことばが分からないから、きよんとしている。

原田 きよんとしている。でも終わるころ

には、キャラクターの名前を覚えていたりする。もちろん、日ごろ方言教育を受けているからでしょうけど、お日様のことはティダって。そういうことを一つでも覚えて帰ってくれたらいいなと思って。それと島のことばに愉快に楽しく接してもらえたらいいかなと思ってやりだしたんですけどね。

木部 きっかけは。一度島を出られて、帰って来られたときに？

原田 帰ってきたらもう子どもたちがしゃべれない状態になっていて何かしなきゃという思いに駆られて。

僕らが小さいとき、日常生活は方言でしたが、帰ってみると、言語環境がもうがらっと変わって、方言で話しかけても子どもたちが全然知らないし、家庭でも使っていないという状態で。これはどうにかしなきゃいけないなと思ったんです。だけど、菊さんみたいに

方言の文法的なことを知らない。ただ使えるというだけ。

木部 それはいろいろ個性があるからね。

原田 できないし、知らないし。最初は四、五人で劇をやるうと思ったんですね。でも、



大勢でやるとなるとそれぞれの都合で活動機会が制限されることに気づき、三人で「ゆがぶ劇団」を結成しました。

木部 ゆがぶ劇団？

原田 はい。「世が富む」という意味ですけど。

僕と、こども園の吉田先生、与論小学校の岩下先生。三人でやりだしたんですね。でも、あの方たちは仕事で忙しいから、「あんたやりなさい」ということになって（笑）。あの人たちは子どもたちの心理をよくご存知でして、こうしたら子どもたちによくウケるとか、演技指導をしていたらいい。

木部 ああ、先生たちが演技指導を。

原田 岩下先生は高校時代演劇部だったんです。

木部 そうなんですか。

原田 はい。ひとりは演劇のプロだし、こども園の先生は表情や動きだとか、どうすれば



子どもたちが集中して見てくれるかとか、よくご存知なので、身ぶり手ぶり、演技の指導をしてもらって。

エプロンシアターの道具がセットで市販されているんですね。中にセリフが書いたテキ

ストが入っている。それを島のことばに直して、ニュアンスを変えた方がいいところは三人で話し合いながら、少しずつ変えて作っただけです。

木部 何回ぐらい上演しているんですか？

原田 『三びきのこぶた』は、もう二〇回ぐらいやっているかな。

木部 二〇回も？

原田 もう一つは、『ねずみのよめいり』。

木部 それ、新作ですね？

原田 新作。『ねずみのよめいり』は、まだ一〇回くらいかな。

木部 でも本当に楽しいから、それをきっかけに方言を覚える子どもたちが増えたということはありませんよね。

原田 ええ。興味を持つてくれるといいのですが。

木部 他に何か効果があるとすれば……。

原田 子どもたちが俺を覚えてくれて、町で会うと、「マリオ」と声をかけてくれるんです(笑)。マリオのおじさんって呼ばれているので。

木部 マリオのおじさん？

原田 子どもたちとのコミユニケーションが取りやすいので、気に入っています(笑)。ただ、「ユンヌフトゥバでエプロンシアターをするおじさん」という認識で、自分たちでユンヌフトゥバを使うということがどこまで喚起されているかどうかは、ちょっとまだ分かりませんが。

お父さん、お母さんたちもエプロンシアターを見て、面白かったとは言うんですけど、そこまでなんです。面白かったのなら、ユンヌフトゥバを使っていきましょうね」ということが言いたいですけれども……。僕らの意図を理解して、「ああ、この人は島の

ことばを使ってほしいと言っているんだな」とわかってくれて、普段からユニヌフトゥバを使っていくようになってくれたらいいんですけれども、なかなかそうはならなくて、ユニヌフトゥバで面白いことをやる芸人さんみたいな(笑)。

木部 でもそういう人がいるのと、いないのとでは、大きく違いますよね。

原田 そうですね。いないよりは、いた方がいいから、そんな感じで少しずつ少しずつ浸透していったらいいなと思います。これからは、そういうこともアピールしていこうかなと思っています。ただ面白いな、で済ませるんじゃないかと、「しゃべれる人はしゃべってくださいね」と。

木部 すごくいいなと思うのは、『三びきのこぶた』のような現代のお話を方言で語るというのは、子どもたちがすごく方言を身近に

感じるんじゃないかなと思って。菊千代さんの昔話の本がありますよね。与論に伝わっている昔話の本ね。ああいうのを方言で語るのもとても大事だけど、現代のお話を方言でしゃべるのも、すごくいいなと思うんですね。

原田 ありがとうございます。子どもたちが接しやすい形だね。ユニヌフトゥバはそんな難しいものじゃない、堅苦しいものじゃない。気軽に入門してきてほしいなと思いますね。

木部 そうですよ。

孫にはユニヌフトゥバで話しましょう

原田 そう思って、やりだしたんですけれど、問題は、そのお父さん、お母さんの世代。今の小学生のお父さん、お母さんが二〇代後半から三〇代で方言が使えない世代なんです。今の小学生ぐらいだったら菊さんが授業

をやっているから、単語も一つ二つは分かる。

子どもたちはそうなのに、そのお父さん、お母さんたちがなじんでいない気がします。

木部 知らないんですか。

原田 知らないですね。この間も、こども園でエプロンシアターを見て「とてもよかったです」っていうから、「じゃあ、君たちもユンヌフトゥバを使って子どもたちに接してあげてね」ってユンヌフトゥバで言ったんです。そうしたら、ぽかんとしているんですよ。

木部 それはちょうど学校教育で、方言はだめだと言われた世代で、周りも使わなくなってきたときに……。

原田 そしてテレビが浸透した時代に育った人たちですね。それがだいたい、三〇代から四〇代前半ぐらいになるんでしょうか。

木部 ちょうど小学生のお父さん、お母さんぐらいの世代ですね。

原田 ですから問題は、子どもたちにあるんじゃないくて、家庭の言語環境なんです。両親がなじんでいないものだから、家で使わない。でもおじいちゃん、おばあちゃんはべらべらですよ。

木部 そうですよね。

原田 だから、使えない人たちに問題があるというより、使える人たちがどう認識しているかというところが問題ですよ。僕らの世代、五〇代よりも上だったら、完全にユンヌフトゥバのネイティブスピーカーですから。そういう人たちがまだいっぱいいるのに、孫に話しかけるとときには標準語なんです。

木部 そうそう、そうなんです。おじいちゃん、おばあちゃんは家でも、もう方言は使わないですね。

原田 使わない。でも、おじいちゃんがおばあちゃんには「マサタン（おいしかった）」っ

て言うんですよ。

木部 おじいちゃんと、おばあちゃんは方言でね。

原田 横同士は与論のことばの方が意思疎通しやすいから方言を使うんだけど、孫には、「おいしかった？」って標準語で聞くんですよ。

木部 どうしてですかね。

原田 どうしてですかね、本当。ぱつとことばが切り替えられる、その器用さもあるとは思うんですけどね。俺のおやは、なかなか切り替えがきかなくて、よそからいらした人には、たどたどしい標準語で。標準語でしゃべるのが苦痛みたいな感じだったんです。

木部 今の人たちは、完全にバイリンガルなんです。おじいちゃん、おばあちゃんが家で方言を話してくれれば、子どもたちはすぐに覚えられますよね。

原田 そうなんです。

木部 お父さん、お母さんは、聞けばだんだん思い出しますよね。

原田 ええ。聞いて分かるという人は、結構いるんじゃないかと思います。

木部 三〇代の人でも。

原田 三〇代、四〇代でも。完全に隔離されていたわけじゃないですから。少しは耳にしていたと思うんです。普段使っていないから、なかなか口をつけて出てこないだけだろうと思います。だから僕らの世代が責任世代で、どうやって使っていくか、使わせていくか、話しかけていくかですね。

木部 一つ世代を飛び越えて、子どもたちが話せるようになれば、その親の世代も思い出しますよね。

原田 ええ。そうしてくれたらいいなと思っています。

木部 おじいちゃん、おばあちゃんは、みんな方言と標準語のバイリンガルですよね。両方持っていることのメリツトって何ですかね。

原田 両方の良さがわかることじゃないかと思えます。子どもたちは、ユンヌフトゥバの良さがわかっていないんじゃないかと思えます。去年、中学校の教頭先生に生徒が対象の写真教室を依頼されました。写真を撮り、文字を入れて、ポスターを作り、与論の良さをアピールする作品を作ろうというものでした。和田さん（写真家）と生徒と写真を撮りに行ったんですね。そうしたらある子が、ポツリと言ったんですよ。「何がいいんだか分からない」って。与論の良さをアピールするというテーマでやっているのに、与論の何がよくて観光客がたくさん来たり、いいって言っているのか、ちつとも分からないって。比較する対象を見たことがないからだと思う

んです。そう言われてみれば俺も確か、中学生のころは何がいいのかよく分からなかったような気がするんですね。

木部 なるほど、当たり前すぎて。

原田 だから今の小学生たちに島で使ってい



るユニヌフトウバが大事なんだよ、大切なんだよといつても、それがなぜ大切なのかというの、よく分からないんじゃないかと思うんですね。だからそこはもう、有無を言わさず（笑）。

木部 よそに出てみたら分かるというはずなんです。

原田 そうだと思いませんね。自分たちが持つて生まれたアイデンティティーに気付いていないんじゃないかなって。確か自分もそうだったなという気がするんです。

木部 でも、よそに出たときに持っていたら気付くけど、持っていないかったら、そのときに気付いても遅いということになりますよね。
原田 だからもう有無を言わさず。いいとか悪いとかじゃなくて、有無を言わさずやっていかなきゃいけないのかなという気はしているんですね。「ユニヌフトウバを大切にしよう



うだとか、大切なことばなんだよ」というのじゃなく、もう有無を言わさず、「太陽」はティダ、「ねずみ」は「ユムヌ」って。そういうふうに見えるせたり使ったりしていった方がいいような気がします。

木部 そうですよ。小さいころって何かよく分からずに覚えて、それが後になって、あ、あれはこうだったのかというふうに気付くことってありますよね。そうか、だからやっぱり有無を言わず。

原田 有無を言わず、ことばの引き出しの中に押し込んでいかないと。僕らがそうでしたから。

木部 後で分かればいいわけだ。

原田 そう思っているんですけど、子どもたちだけではなく、お父さん、お母さんたちにも、分かってほしいなと思うんです。

木部 そうですね。

原田 こういうことがありました。町長、教育長とか役場の課長クラスが町民と意見交換をする場があるんですよ。

木部 町づくり懇談会。さつき菊さんが言っていました。

原田 そうです、それです。その中で、方言教育に対して「ユンヌフトゥバで食べていけますか」と教育長に質問をする。婦人がいて。ユンヌフトゥバが流暢にしゃべれる人ですよ。たぶん、都会に出てことばの面で差別を受けたら、気まずい思いを経験している世代じゃないかと思うんですけどね。流暢に使える世代でも、ユンヌフトゥバに対する認識の違いがあり、なかなか一筋縄でいかないという気がしますね。「あなたたちが使わなきゃ子どもたちに残らないですよ」と言っても、「それで食べていけるの」と言われると。

木部 食べていけないですかね？

原田 僕は食べていけるような気がするんですけどね。

木部 文化は地域の資源ですよ。

原田 そうですよ。

木部 食べていけるかというのは直接的すぎ

るけど、それを大事にしたら、地域がもっと豊かになる。

原田 地域の持つ特色の一つとしてとらえる
と、極端な言い方をすれば、観光資源にもな
るかもしれないですからね。

木部 うん、そうですね。

原田 「あちゃー、こういうことを考えてい
るんだ」と思っ、ちよつと愕然としました。
だけどそれを説得するだけの論理がまだ整理
できていなくて。

みんなでエプロンシアターを

木部 次の新作は？

原田 次の新作、えー(笑)。一つやると、
もうリクエストされたりするんですよ、あつ
ちこつちで。

木部 そうですね、リクエスト。これもやつ



てくれ、あれもやつてくれと。

原田 まあ、ぼちぼち考えてみます。もう一
人面白い仲間がいて、新しいストーリーを書
いてみると言ったんですね。『三びきのこぶ
た』と『ねずみのよめいり』のキャラクター
を合体させて(笑)。

木部 そういうのをもつとたくさんの方がや
るようにやつたらいいですね。

原田 ええ、そうなんですよね。あの人があつ
ているから任せておけばいい、というのでは
なくて、自分もあなたも、みんなでやろうよ

というようになるといいですね。

木部 そうですね。

原田 ある人がやっているのと、「あれはあの人がやっているもの」となり、あの人のテリトリーみたいなとらえ方をしている人が結構いる。

木部 そうなりますよね。さっき、菊さんもそういうふうにおっしゃっていましたね。方言だったらもう、菊さんに任せておけばって。
原田 だけど菊さん一人では、島の人みんなが使っていくようにはならないですから、そのところを分かってほしいなと。

木部 そうですね。

原田 ユンヌフトゥバに接する機会も、どこも園で、おじいちゃん、おばあちゃんと触れ合う場を設けて、昔のかざぐるまを作ったり、ソテツで虫かごを作ったり、その作り方を教わるんですけど、そういうときもおばあちゃ

ん、おじいちゃん同士は方言で話すんですけど、子どもたちに向かうとなると、「ここはこうしてね、こうだよ」と、標準語になっちゃうんですね。せつかくの機会なのに、もったいないなと思うわけです。

木部 そうですね。

原田 「子どもたちが分からなくてもいいから、ちゃんとユンヌフトゥバでやりましょう」という働き掛けをして、こういう触れ合いと併せてことばを継承していく場ができればいいなと思うんですけどね。

木部 そうか。本当にもつたいないですよ。

原田 もつたいないです。

木部 じゃあ、最後に原田さんからのメッセージを子どもたち、あるいは若い人たちに。
原田 どちらに対してもユンヌフトゥバを使うおうですね。あなたのアイデンティティだ

よって。

木部 使える範囲で使う。少しずつ勉強していけば、方言が増えるし、知識が増えますね。

原田 はい。僕も今、勉強中なんですよ、帰ってきてからいろいろ。与論に中学三年までしか使えなかったので、それまでに覚えたことばしか使えていないんですね。大人が使うようなことばに慣れていないものですから、そういうことばが耳に入ってくると、おお、そうだったのかとメモをすることが結構あります。
木部 ことばっていくつになっても新しく学びますよね。どうもありがとうございます。

対談3

若い世代から見たユンヌフトウバ（与論のことば）

与論民俗村 菊 凜太郎

与論に戻って思うこと

木部 今年の四月に筑波大学の大学院をやめて、こちらに戻ってこられたと伺います。

凜太郎 第一の理由としては、ここ数年、甚大な台風被害があつて、父と母と、あと祖母と高校生の弟だけで民俗村を維持していくのはとても難しいなというのを感じていたので、できるだけ早く戻つてこようという思いがあつたんです。同時に、自分も東京の方で就職して、三〇歳すぎくらいまではあちらにいて、それ以降に戻つてこられたらと思つて

いたんです。ただ祖母も年を重ね、以前より体力が衰えたように感じていたので、元氣なうちにできるだけ祖母から聞ける話を直接聞いて、残しておきたいという思いがあつて、この四月から戻つてくることを決意しました。

木部 小さいころからこの民俗村で育つて、民俗村が与論においてどんな役割を果たしているとか、位置付けにあるとか、そういうことを感じて育ちましたか？ それとも、あんまり考えない？ 当たり前のこととして。

凜太郎 ここを出る前は、あまり考えたことはなかったですね。やっぱり実際に外に出て、



民俗学という学問をしまして、将来的にここを継ぐことをより深く考えるようになってから、ここが与論の中でどういった位置付けなのか、地元の子どもたちにとって、地元の人たちにとってどういった場なのかを考え直しました。なので、小さいころは特に。家にくさんお客さんが来るなどか(笑)、祖母が集めていたものを展示してやっている施設など、そういった軽い感じですよ。

木部 大学で民俗学をやるうって思ったの

は、やっぱりここで育ったことがきっかけになってるのですね。

凜太郎 そうですね。高校の二年生に上がるときに、文理選択があるんですけども、その段階では、私は建築士とかも夢としてあったので、理系に進もうかなと思っていました。でも、将来的にはここを継ぐ可能性もあるなと思って、建築士という夢はあきらめて、大学で民俗学を専攻していこうということ、で、文系に進みました。

木部 今、与論では大学を出てまた戻ってくる人が多いですよ。同級生でも戻ってきた人が多いって聞きましたけど。

凜太郎 そうですね。

木部 それは、やっぱりここに魅力があるということなんですか？

凜太郎 そうですね。昨日一緒にいた山君(同級生。役場勤務)は、与論の海が好きで、そ

れをほかの人たちにも宣伝したいという思い
があつて、戻つて来たつて言つていました。
やっぱり与論の何かしらが好きなんですよ
ね。私としては、島外に出て、与論の文化と
か方言とか民俗とかを残しているこの家を誇
りに思いましたし、そういうのをしっかりと残
していききたいなという思いがあつたので、
戻つてくるという決意もできたんじゃないか
など、今になつて思います。

木部 与論のよさというと、海とか、ほかに
何かありますか？

凜太郎 はい。人なつこさというか、人の温
かさみたいなのは私自身感じますし、島外の
方もおっしゃいます。島外にいた頃は、しば
らく会つていなかった親戚とか近所の方と、
長い間顔も見えていなかったのです、どう接して
いいか分からない部分がありました。帰つ
て来ると、そういった人たちが気軽に声を掛



けてくれたり、「元氣にしたか」とか言っ
てくれたりするので、地元に戻つてきても
ちゃんと受け入れてもらつているような感覚
を持つています。それが、島外から来た人が
感じているものと一緒なのかどうかというの

は分からないですけれども。

木部 島外から来た人も結構多いですよ。

凜太郎 そうですね。移住した人も結構いらっしやいますね。五人に一人って言ったかな。今、五千人くらいいる与論の人口のうち千人くらいは、島外出身者という話をされてきました。

木部 そんなにいますね。これだけ島外の人も来るといのは、さっき言った与論の温かさみたいなのがあるんですかね。

凜太郎 いい意味でも悪い意味でも、人に対して警戒心がないとか、かなりオープンな性格なので、受け入れやすい心を持った人たちが多いかなという部分は感じますけどね。

与論をもり立てるために

木部 これから、若い凜太郎さんたちの世代

がこの島を発展させる力になっていくと思うんですけれども、島をもり立てていくのにどういうことが必要ですかね。

凜太郎 まずは、島出身の若い人が帰ってくるような環境をつくっていくこと、帰ってきたいと思わせるためにどうしたらいいかが大事かなと思います。私だったら、民俗村を継いでいかなきゃとか、山君だったら、与論の海を全国に発信していきたいとか。それを再認識した上で、現実問題として、ここで働く場があるかどうか、そういった環境を整えていくなり、自分たちでつくっていくなりしていかないといけないというふうに思いますね。

木部 やっぱ環境づくりですね。

凜太郎 そうですね。私が島外にいたときも、同級生と話していて、与論に帰りたいんだけど、実際どこで働くかとなると役場とか、あ

とは丁A（農協）だったりとか、限られるんですよね。だから少し帰島を躊躇してしまふ部分があるので、そういった窓口をより広く持つて受け入れられるようにしたら、帰ってきたい人はもっとたくさんいると思うんですよね。

木部 やっぱり仕事ですかね。

凧太郎 あと、できることなら、島外の方が一定の時期、住めるようなプログラムとか、そういったものをつくって、与論のことをより知ってもらえるような経験ができる場が設けられたらと思います。それが将来的に永住につながれば、いいですね。

木部 与論はリピーターが多いんじゃないでしょうかね？

凧太郎 多いですね。私はそんなに面識はないんですけども、父とか母とかの話を知っていると、毎年この方はいらっしやっている



んだよとか、宿泊先も、毎年この宿にしか泊まらないという方とかもいます。何度も通いたくなるような、まあ、第二のふるさとのような感じなんですかね。そういう方々は、たぶん与論の自然も好きなんだと思うんです

けれども、たぶん人に会いに来ているんじゃないかなと思います。

木部 そうですよ。やつぱり人ですよ。

凜太郎 はい。なので、そういたりピーターとの関係はつくっていききたいと思えますし、これから、また新たなリピーターを増やしてもいきたいです。観光客が増えてきているので。

与論の方言を残すには

木部 島の魅力の一つに方言があると思うんですけども、凜太郎さんの世代は、聞いたら分かるけども自分ではしゃべらないという状況ですか？

凜太郎 そうですね、だいたいは。でも、私たちの世代で聞き取れない人もちよつと出てきていますね。だいたいの人はある程度、聞

けると思うんですけども、同級生とか自分の先輩とか、年の近いそういった方々と会話するとなると、やはり標準語が一般的ですよ。ね。

木部 方言を復活させるということはできませんか？

凜太郎 たぶんできると思うんですけども、それをするためにどうしたらいいかというの、私たちもよく分かっていないんですよ。成功の形というのがいまだに分からない(笑)。父も試行錯誤しながらやっているんですけども。たぶん、父が求めているのは、無意識のうちに方言が日常会話の中で使われて、島外の方とは標準語というように使い分けができるという感じだと思うんですけど、現状としては、強制的に話させられているというか。動機づけというか、取っ掛かりは必要なんですけれども、今は、「話さない」と、

話さないと」みたいな感じなので、なかなかうまくつながらないんじゃないかと思えます。やはり私たちからどうやって話させるかという……。

木部 そうですね。

凜太郎 その辺は難しいですよ。だからといって、何もしなさずると本当になくなってしまふ可能性もあるので。

木部 さんさんみたいに役場に勤めると、お年寄りの人と接するので、そしたら、やっぱり方言を話さなければという環境になるんですかね？

凜太郎 役場のかたの会話はどうなんでしょう。私と同年代で役場の上司と方言でしゃべっているというのは、あんまり聞いたことがないですね。

木部 なるほど。上司の人には方言は使いにくいということがあるんですかね？

凜太郎 そうかもしれないです。方言だとある程度の距離感が縮まるということがあります。職場にもよると思いますが、上司との距離感を気にして、どうしても方言が使いがらみという雰囲気があつても、おかしくはないと思うんです。

木部 そうですね。確かに上司に方言で話しかけるとするのは、ちよつと失礼な感じ、あんまりなれなれしすぎる感じが……。

凜太郎 そうですね。上司からしても「急にどうした？」って感じになるかもしれませんし。

木部 じゃあ、やっぱりまずは同級生とか同じ年の人たちと方言で話すってことですか。

凜太郎 そこから始めていけばいいかなと思います。でも、やっぱり縦のつながりとか、年配の方々と方言を話す必要はありますね。そう考えると、方言が話せる年配の方々

と交流できる場を設けるというのも、一つの方法ですよね。そこで、年配の方々に方言を話してもらって、若い人たちも聞く耳はあるので、あとは自分たちの意識を変えて、方言をどんどん話していこうという気になれば、間違った方言を使ってもちゃんと直してもらえるだろうし、直してもらうことによって、正しい方言を覚えて自信を持って話せるようになっていくんじゃないかなと思います。

なので、私たちより年上の方と実際に会話をしてというのが大事かなと思いますね。

父も、テキストを出しているんで、そういったものを参考にしながら。でも、最初は何より話して、間違ってもいいんでちょっとずつ話していくということが大事かなと思います。**木部** 昨日、お父さん（秀史さん）と話してね、小学生ぐらいまでは、方言を教えたなら、みんなわりと面白がって、楽しがって話すん



だけど、中学校ぐらいになると話さなくなる。それは思春期だから、そのころから恥ずかしいとか、何かそういうふうな気持ちになるからかなとかいう話をしたんですけど。

凜太郎 確かにそれはあるかもしれないです

ね。私も小学生当時から、父が公民館とかで地元の子どもたちを集めて方言教室をやっているというのもあって、何か一歩引いてみたいなのがあったんですよ(笑)。だから昔は、言ったら悪いですけど、方言が嫌いでしたもんね(笑)。

木部 そうですか(笑)。

凜太郎 昔は本当に。

木部 気恥ずかしいというのものもあるかもしれないね。年配の人も方言でしゃべるし、若い人も方言でそれに応えるという、そういう場をつくれればいいですね。それはどういう場になるかな……。

凜太郎 そうですよ。それが勉強会なのか、宴会なのか。そういうった場の設け方も、ちょっと考えた方がいいとは思っています。

木部 宴会はいいかもしれませんね。

凜太郎 そうなんです。そっちの方がよ

りフレンドリーになって、口数も多くなつて、話は弾むと思いますけどね。

木部 昔はそうやっていたわけですよ。標準語がこんなに普及する前は、大人と子どもはみんな方言でやりとりしていたわけですよ。ね。

凜太郎 はい。だけど、今は、親は子どもに対しては標準語を使って、友達とか自分の親とか方言を話せる人に対しては方言を使う。

子どもたちは、普通に親から標準語で話されているので、標準語で返してというサイクルが出来上がっている。なので、私たちの意識改革も必要なんですけれども、方言が話せるかたも、標準語で話す癖がついているのをちょっと直すというのが必要だと思います。でも、癖なので、それを変えていくというのは難しいかもしれないですけども。

木部 ここ(民俗村)で、お客さんが来て説

明するとき、全部方言で説明するか。実は今、凜太郎さんのお父さんも共通語で説明しているんだけど、相手が分かっても分からなくても、全部方言でやるというのはどうですか? (笑)

凜太郎 確かにそれはそれで面白いですよね (笑)。時々その手法を母がやるんですよ。

木部 本当? お母さんが?

凜太郎 はい。お客さんが入ってきたときに、「ようこそいらつしやいませ、今日はお越しくださいありがとうございます」みたいなことを、三〇秒、一分間ぐらいダーツと方言で言ってから、今はこういうことを言ったんですよ、というのを。その間、お客さんはいポカーンとしていますが (笑)。与論の方言に触れてもらえるとという意味では、面白いですけどね、端から見ているんですよ。

木部 ポカーンとしているんですね (笑)。

凜太郎 そうなんですよね。旅のかたにも意味が通じるような方言だったらいいんですけども、都会のかたからしたら、まったく意味のわからない別言語のようなものみたいですよ。

木部 もう外国語と同じですよ。

凜太郎 そうですね。

木部 だから、いろいろな価値があると思うんですよ。標準語にない、いろいろな特徴があるから、それでまたいろいろ考えが浮かぶと思うんですよ。

凜太郎 そうですよ。できたら一個の単語くらいメジャーにしたいです、全国区で。

木部 全国メジャーね。

凜太郎 例えば沖縄だったなら「ちゅらさん」というのがありましたけど、宮崎だったら「どげんかせんといかん」とか。そこで例えば、「トートウガナシ」(注1)と言ったら、す

ぐ与論をイメージしてもらえような。

木部 「トートウガナシ」いいですね。あとは、自分よりも下の今の人たちに、与論を一時的にしても出ていく、その前に知ってほしいこと、与論のこれだけは知ってほしいというのは何かありますか？

凜太郎 与論のこれだけは知ってほしい…。何でしょうね。島を出たときに「与論島出身なんです」と自己紹介すると、当然「人口は何人くらい」とか「どうやって行くの」とか「すごい海がきれいだよね」とか、そういう話になるんですけど、私の場合、民俗学を専攻していたのもあったせいか、島の歴史や慣習について聞かれることもありました。昔は琉球国だったんだけど、次に薩摩藩に属して…と、そういった簡単な歴史の部分を知っておいてほしいんです。

また、やはり方言の話になるんですよ、



どうしても。だから内地のかたが聞き慣れないような言語が今も残っているんだということを知っておいてほしいです。「与論は鹿兒島弁に近いの？ それとも琉球のことばなの？」みたいな話になったときに、ちゃんと

何かしら鳥のことばを紹介してほしいです。

「トートウガナシ」でも、「ドーカドーカ」(注2)でも。

木部 説明できる程度の知識ですね。

凜太郎 知識は持っていてほしいですね。

与論の先輩たちへ

木部 じゃあ、今度は上の人へ。帰ってきて、自分より年上の鳥の人に、ここはこうしてほしいなとか、これは直してほしいなとか、そんなのはありますか？

凜太郎 直してほしいのは与論けんぼう(注3)ですね(笑)。

木部 そうですか。どうして？ お酒を飲まなければいけないのが嫌なんですか？

凜太郎 そういうわけではないんですけど、島外からいらっしやったかたを歓迎する

場とか、そういった場とかですね。それが二周、三周くらいならまだいいんですけど…。

木部 ああ、何周も続く。

凜太郎 そうなんですよね。そういった飲み方は、やはり健康を害するので。特に男性の場合、回ってきたらもう飲まざるを得ない。

もう飲めないのでお返ししますというのは、車で来ていたり、体調が悪かったり、そういった場合を除いては難しいです。飲み場の雰囲気や、酔気を壊してしまうんじゃないかなと思いますよね。そこで、全然気を使わずに断れるような雰囲気があれば。与論けんぼうの形は、ちょっと変えた方がいいかなと思いますね。

木部 それは言つとかないといけない。若い人はみんなプレッシャーに感じているんですかね？

凜太郎 人それぞれだとは思いますが、そう感じている人もいます。飲んでい

るときはみんな楽しいんですけれども、翌日後悔したりとか。実際にけんぽうでお酒が飲めなくなったりしまったり、体を壊して飲めなくなったりした人もいますから。

木部 もしかして大人の人も、半分はいいけど半分嫌だなと思ってるかもしれないね。

凜太郎 そうですね。大人の方々も、たぶん思っている方は少なからずいらつしやるんじゃないかなと思いますけどね。

木部 ほかには？

凜太郎 そうですね。あとは、やっぱり今の話と通じる場所もあるんですが、体育会系な部分はあるかもしれないですね。どこでもあることですが、先輩の誘いは断りづらいとか。それに与論は人とのつながりが強い島なので、他と比べると身近な先輩が多いと思います。

木部 断りづらい。そうですか。

凜太郎 都会にいるみたいに、一回きりの付き合いで、もう顔を合わさないということがあり得ないので、あんまり関係性を悪くすることもできないですよ。

木部 そこは難しいですよ。みんな知っている人たちばかりなのでね。でも、それがまたいいところですね。人間があつたかいという。

凜太郎 そうなんです。

木部 難しいけど、それをうまくやっていくと、もつとこの島はよくなる。

凜太郎 そうですね。よくなりますよね。

木部 若い人がもつと発言して。

凜太郎 はい。発言して、そういった私たちより年上の方々にも、ちゃんと自分たちの意見がもつと言えるような環境ができたらいんですけれど。

木部 そうなんです。

凜太郎 だから、グループを組んで。若い人たちの間にあるのは青年団くらいなので。

木部 じゃあ、そういうグループが世代を超えて意見を言い合う。そういうことですね？

凜太郎 はい。そうですね。例えば、方言を守っていく会でも何でもいいんですけど、若い人たちがグループをつくって、そういう人たちと年配の方々とのグループとが交流しながらやっていけたら。

木部 それから人間関係も。ここ(民俗村)がその中心になるんじゃないですか？

凜太郎 なりますかね。していただけたらとは思いますが。そのためには、まず私自身がちやんと方言を。

木部 もし本当にそうだったら、与論だけじゃなくて全国の博物館の見本になるのではないかと思います。都会には博物館がたくさんありますけど、何かイベントがあったらそれを見

にいったって、また次にいいイベントがあったら見に行くという、一回一回の関係しかないんですね。博物館が中心になって人と人とを結びつける、それが博物館の本当の在り方じゃないかと思うんです。でも、都会ではそれはなかなか難しいんですよ。

凜太郎 難しいですよ。

木部 都会って、移住した人が多いし。だから、それこそこういう地方の方がモデルとして成功しやすいんじゃないかと思えますね。

凜太郎 そうですね。都会よりかは、そういった人間関係は密なので。

木部 都会の博物館は、いつもお客さんを集めるイベントを計画しなきゃいけないんですね。集客率が悪いと、いろいろ言われるから、いつも人を引き付けるイベントを企画しなければならぬ。でも、博物館の人はみんな、それだけじゃなくて、もっと地道な、基本的

な文化を考えるセンターにしたいと思って
いるんです。土浦の博物館はどうでした？

凜太郎 土浦の博物館は、地元根付いた博
物館だったと思います。展示解説会や講座と
かも定期的に開いて、近くの方々はもちろん、
遠方からもいらっしやっていました。展示も
年四回それぞれの季節で展示替えを行って
いて、そういった方々が定期的に博物館に足を
運べるような環境づくりはされていました。
だから、結構地元に着したような博物館だ
なという印象でしたね。

木部 そうですか。

凜太郎 なので、私としても非常にやりやす
かったですし、いい経験をさせてもらいまし
たね。

木部 民俗村は、今でももう十分、与論の中
心だと思えますけれど……。

凜太郎 観光客とかだけじゃなくて、土浦の



博物館のように、地元の人たちが来て何かし
らいろいろ学んでもらえるようなことができ
るような場になりたいなと思います。もう少し
島内の人の来館者数を増やしたいという気持
ちはありますね。

木部 昨日もそのような発表をなさっていらっしやいましたね。そうなるように、がんばってください。どうもありがとうございます。しました。

注

- 1 ありがとうございます。相手に対する感謝の気持ちを表すときに発する語。(『与論方言辞典』より)
- 2 「どうかよろしく」に当たる語。「ドーカドーカ」のように二回くりかえされる。
- 3 客人をもてなすための飲酒法。

方言だから伝わることを考えて

白岩 広行

実験・方言で書いてみる

このブックレットは、方言の危機と、その記録・継承をテーマにまとめられると聞いて、今、この文章を書きはじめています。歯がゆいのは、この文章を標準語で書かねばならないことです。方言には「書きことば」というものが整備されていません。私は東北人で東北方言が母語なのに、方言について書くこの文章を、方言で書くことはできないのです。なんという自己矛盾でしょう。

日本語の標準語は、古事記や日本書紀以来の積み重ね、明治維新以降の外来語の導入などを経て、書きことばとして十分に整備されてきました。学術研究や政治経済の場などで、高度に知的な内容を表現できる点において、おそらく世界で

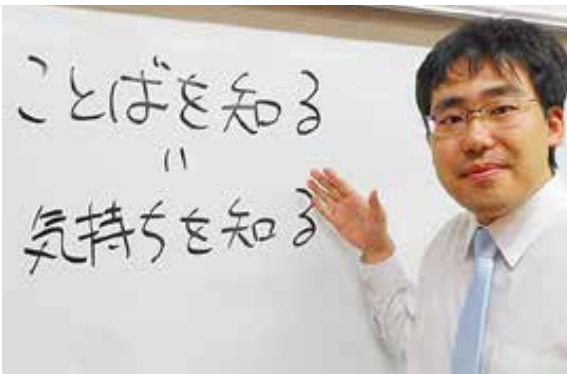


写真1 筆者近影

も有数のことばでしょう。

一方、方言は話しことばですから、文字に書くことは基本的にありません。その素朴さが方言の魅力でもあるのですが、今や一人に一台スマホがあつて、会話といえは口で話すだけでなく、LINEで書くのが当たり前の時代です。実際、方言の会話をそのままLINEに書く人もいますでしょう。ただ、東北方言には標準語にない発音がいくつかあり、それをどうやって文字にするかは、人によってバラバラのようです。

ならば、方言でも表記法（文字に書く方法）を整備してよいはずです。海外の少数言語の復権運動でも、その言語の記録・継承のために表記法を整えることが大きな意味を持ちます。

幸いなことに、私の母語である福島方言は、標準語の表記法を応用することで、簡単に書くことができそうです。学術論文用のお堅い文体はありませんが、会話調の文体なら文字に書けるかもしれません。研究者としてみずから範を示し、方言の文章を書いてみるのも面白い試みです。

そんなわけで、以降の文章は福島方言で書きます。安心してください。難しい表現は避けて初級レベル



写真2 筆者の母校と福島市のシンボル信夫山
(映画『となりのトトロ』主題歌「さんぽ」の舞台とされる)

にします。簡単な語積をつけるので、福島方言を学ぶ手助けになるでしょう。方言の記録・継承にむけて、この記事自体を実験的創作にすることをお許しください。方言だからこそ伝わる何かがあるかもしれません。

俺の生まれ育ち

俺は福島県保原町ほげらまちつつうとこで生まっちゃんだ。今は市町村合併して伊達市だな。親父もおふくろも、江戸時代からずっと保原町で農家やってる家だから、俺も生粋の福島人つつうわけだ。福島のことばで育てらっちゃから、俺にとつて、標準語つつうのは、第二言語なんだよ。今は東京で暮らしてっけど、独り言うときは、やっぱし福島のことばなんだよな。こっから先も、普段の独り言みてえに書いてみっから、しばらくつきあつてくんにか。

【語釈】

- 生まっちゃ||生まれた、育てらっちゃ||育てられた(「れた」↓「っちゃ」という音変化)
- 暮らしてっけど||暮してるけど(「る+k音」↓「っ+k音」)



写真3 福島盆地遠景

という音変化)

● 独り言みてえ 〓 独り言みたい (ai → ee という音変化。mitai → mittee)

● くににべか 〓 くないだろうか (「れない」
↓ 「んに」という音変化。「べ」は「だろう」の意味)

小学校さ上がるくれえのとき、俺は保原の農家で、親父とおふくろと弟と、じいちゃんばあちゃん、ひいばあちゃんと住んでた。四世代同居だな。ひいばあちゃんは明治三十九年の生まれだから、だいぶ古い方言しゃべってたっけな。昭和が平成になる頃だよ。方言の研究者もいろいろだけど、俺みてえに、農家で暮らした経験ある人は、若手だと意外と少ねえんでねえかな。わりとみんな、都会っ子どもな。

【語釈】

● 小学校さ 〓 小学校に (「に」は「さ」の意味)

● 住んでた 〓 住んでた (「た」は「た」の意味で、自身の体験談を語るとき使われやすい)



写真4 近所の田んぼ

方言の記録のために

たぶん他の人も書いてっと思うけど、方言の記録で必要なのは、談話資料、辞書、文法書の「三点セット」なんだよ。英語だの中国語だの、外国語の勉強すつとき、まず会話のお手本聞いて、新しい単語覚えて、文法解説読むべした。それと同じで、「このことは、どんなことばかな」つうのを知るには、実際の会話の資料と、単語を集めた辞書と、文法のことろわかる文法書の三つが必要なんだ。

【語釈】

- 書いてっつと書いてると（「る＋t音」↓「っ＋t音」という音変化）
- 読むべした⇨読むじゃないか（「べした」は「じゃないか」の意味）
- 同じ⇨同じ（福島方言では「おなし」あるいは「おんなし」と読む）

俺、後悔してっつこと、ひとつあんだ。俺が大学二年のとき、ひいばあちゃん死んだんだけど、元氣なうちに、ひいばあちゃんに方言のこと聞いておくんだつたなあ、つて。んだから、今は、ばあちゃんさ方言のこと、いろいろ聞いてんだよ。ばあちゃん、もう八十歳過ぎたけど、ありがてえことに、今でも畑さ出るくれえ元氣だから。して、こないだ、今まで聞いたことをもとにして、とりあえず簡易版の「三点セット」を報告書にまとめたんだ。談話資料としては、ばあちゃんとな俺の日常会話、三時間分くれえ、まとめた。

【語釈】

- あんだ 〓 あるんだ（「るん」↓「ん」という音変化）
- んだから 〓 それだから
- して 〓 〓 して
- こないだ 〓 この間

平凡な日常は大事なんだ

俺、腑に落ちねえこと、あんだよ。最近マシになったけど、福島の新ニュースつうと、一時期、原発のことばっかだったべした。もっと他の話題もあるはずなのによ。

だいたい悲劇か美談かのドラマ仕立てなんだよな。「福島の被害はこんなに深刻です」つう悲劇か、「こんなにひどい状況でも前向きにがんばる人がいます」つう美談か。どっちにしても「福島 〓 原発でひどい」つうイメージが前提なわけだ。そのくせ「深刻な風評被害を前に、報道にたずさわる我々のできることを考えなくてはなりません。……さて、次のニュースです」って、「さて」じゃねえよ。考えてくれよ。風評被害の原因は、あんたらだつうの。

震災の年の年末、実家さ帰ったつて、福島の駅前さ「星に願いを！」つう看板立ってたのよ。



写真5 俺が作った報告書

市の企画なのかな。見てみると、おもしろいんだ。通行人が星マークのシールさ願いごと書いて、貼ってぐんだな。震災の年だから「早くもとの福島にもどりますように♡♡♡」つつう願いごともあるけど、「ダイエットが成功しますように！」とか「頭が素晴らしく良くなりますように」とか、震災と関係ねえことも多いんだ。「嵐のコンサートに行く」ってのもあったな。

【語釈】

● 帰ったつけ＝帰ったら「たっけ」は「たら」の意味

● おもしろいんだ＝面白いんだ（「おもしろい」は「面白い」の意味）

震災の年だって、みんな原発のことばかり考えたわけでもねえんだよ。平凡な日常生活を守った人が、いっぱいいたんだ。それって、すご



写真6 街の人が願いごとと貼ってぐ



写真7 福島市民の願いごと

いことだよ。いや、震災のあるなしと関係ねえ。平凡な日常は、いつだって大事なんだ。でも、平凡なことはニュースになんねえんだよな。

【語釈】

- 考えたつ || 考えてた (「てた」↓「った」という音変化)
- わけでねえ || わけじゃない (「でねえ」は「じゃない」の意味)
- なんねえし || ならないし (「らない」↓「んねえ」という音変化)

ことばの記録は生活の記録にもなる

俺、方言の記録は、日常生活の記録にもなつと思うんだ。ニュースの記事は、東京の偉い人の編集が入つぺ？ でも、例えば、談話資料は、地元の間が地元のことはでしゃべつたまんまを文字にすんだから。何の編集も入んねえ、ありのままの日常なんだ。俺が作った談話資料とは、ばあちゃんの普段の会話が入つてんだ。震災だの原発だのの話もあつけど、昔の思い出だの、最近の畑の話だのもある。よく考えつと、生活の記録なんだよ。

【語釈】

- 入つぺ || 入るべ || 入るだろう (「る + b 音」↓「つ + p 音」という音変化)

それに、標準語のニュース記事では伝わんねえことが、方言では伝わる気がすんだ。「ことば

を伝える」つつうことは、「生活を伝える」つつうことでもあんだべな。

福島に限んねえ。もし興味ある人いたら、「三点セット」作る仲間さ、混ざってくんにいべか。おもしろい話あつたら、俺さ教えてくれつと、うれしいなあ。

方言で書いてみて

以上、方言の記録・継承について、私の取り組みと考えることを紹介しました。この記事を方言で書いたのは、本気で記録・継承活動を進めるなら、研究者が率先して方言を実用する試みがあつてもよいと思つたためです。

「お年寄りと話す機会がないから方言を使う場面がない」というのはよく聞く話です。だったら、使用場面を広げてみようと思ひました。こんなふうに、エッセイ風の文章は方言でも書けるのですから、ブログやツイッターも方言で書けるはず。私のように、方言を使いたいけど話す相手がいなくて悶々としている人が、一定数いるのではないでしょうか。方言を書いてみる試みを、福島から始めてみるのも面白いと思ひました。震災後の福島は、新しいことを始めるのに絶好の場所です。



写真8 福島県キャッチコピー「ふくしまからはじめよう。」

ただ、この試みが成功だったか失敗だったか、私にはわかりません。機会があれば、感想をお聞かせいただければ幸いです。話題が研究に關することだった点、相手のいない一人語りだった点で、やはり方言では書きにくかったというのが本音でもあります。こうやって標準語に切り替えてからのほうが、筆が進む、進む（笑）。

でも、やっぱり方言だからこそ伝わるものがあつたと私は思いたいのです。これが私の母語ですから。

付記・福島方言の表記法

最後になりますが、福島方言の表記法に關して、気をつけたことを三つ書いておきます。この三点は、福島に限らず、東北諸方言に共通することだと思えます。発音に即した表記よりも、読みやすい表記になるよう心がけました。

まず、濁点の問題です。福島方言では、か行・た行の音を濁音のように発音することがあります。例えば、「江戸時代から」は「江戸時代ガラ」と発音します。でも、そのようなか行音・た行音にすべて濁点をつけると読みにくいので、濁音をつけずに「江戸時代から」と表記しました。もし音読するときは「江戸時代ガラ」と発音すると福島方言らしくなります。

つぎに、ズーズー弁の問題です。伝統的な福島方言では「し」と「す」の音を区別せず、どちらも「ス」に近く発音します。例えば「しばらく」は「スバラグ」に近く発音します。でも、や

はり「すばらく」と書く readability が低いため、それと、私の世代では「し」と「す」を発音し分けるので、「しばらく」と表記しました。

そして、「が」「を」の問題です。福島方言では、「が」とか「を」という助詞をあまり使いません。「俺が酒を飲んだ」ということは、「俺、酒飲んだ」のように助詞を使わずに表現します。でも、文章で「が」「を」を省略すると読みにくいので、「が」「を」を補って書いたところがあります。

読み書きしやすい表記法を整備するのも研究者の仕事です。こちらもご意見いただければ幸いです。

また、この記事で紹介した報告書は無料でお送りしますので、ご希望の方はご連絡ください。ネットで「web白岩」と検索すると、私の個人サイトが見つかります。連絡先はそこに書いてあるとおりです。

(本稿には、JSPS科研費26770160および15K02557の成果が含まれる。)



写真9 街中で見かけた方言の表記例 (か行・た行に濁点をつける表記も街中には多い)

方言で「出雲」を伝える

友定 賢治

はじめに

出雲方言（鳥根県東部を中心とした地域の方言）の調査を始めたのは、大学の卒業論文の時なので、もう半世紀も前になります。かわり方に濃淡はありましたが、継続してきました。その間、目的も変化し、現在は、言語学的な記述だけでなく、地域の皆さんと協力して、出雲方言の記録保存・継承活動を重要な課題としています。

自身の中での変化を振り返りながら、地元の方々の地域に対する思いや、方言の記録・継承の意義や方法、さらに問題点などを考えてみます。

出雲方言とは

鳥根県東部を中心に、鳥取県西部と隠岐島を含む地域の方言で、旧国名の出雲・伯耆ほうぎから、雲伯ぼく方言とも称されます。周辺方言とは異なり、古態性を有し、東日本や東北方言と共通する点が

あり、特異な方言と言えます。いわゆるズーズー弁といわれる中舌母音、イとエの区別があまりないこと、「クワ (kwa)」などの合拗音、「ニョーバ (女房)」など開音・合音の区別があること、母音の無声化、断定辞の「今日はええ天気ダ」、促音便の「お金払ッタ」などです。

なぜ、出雲地方にこのような特徴を有する方言があるのか、出雲方言の成立をはじめ、さまざまな課題が、諸説あるものの未だ解明されていません。

方言への興味

最初は、共通語とは違う言い方や、私の母方言（岡山県新見市）とは異なる方言への興味で、たまたま対象が出雲方言というだけのことだったように思います。中舌母音や「ダンダン（ありがとう）」、「コゲ・ソゲ・アゲ・ドゲ（こう・そう・ああ・どう）」、「〜ゴセ（〜くれ）」、「〜カイネー（〜かねさ）」などが、もの珍しく、興味を持った発音・言い方でした。終助詞「〜カイネー」は、母方言で「イ」を含む語形は老年層の言葉でしたので、出雲で私と同世代の人間が使うのが不思議な感じがありました。このような、特徴あることばを知ることにが楽しかったのです。



写真1 「だんだん（ありがとう）」

出雲方言の言語学的解明

その後、言語学を専攻するようになってからは、当然ですが、単に方言への興味ではなく、出雲方言の言語学的な解明が目的となりました。上記のように、出雲方言は、西日本では特異な性格をもつ方言で、解明されていない問題も多くあります。必然的に、隠岐・石見（鳥根県西部）方言とのつながり、中国山地、さらに九州や日本海側、東北方言との関係などを解明することが求められますが、当然一人でやれることではありません。

また、方言だけを見ていても上記のような問題は解明できないこともすぐに見えてきました。

四隅突出型墳丘墓よすみでつりゅつがたふんきゆうぼが山陰から北陸にかけて存在することは、古代からの日本海交流を考えないといけませんし、主に東日本にみられる、次男・三男など長男以外をまとめて「オジ」というのが隠岐や出雲にみられることは、家族制度の問題を考えないと解決できません。出雲の歴史・民俗などを総合的に捉えないと答えは見えてこない問題ばかりです。壮大な研究テーマであることが分かるにつれ、どこを目標に研究をするのか迷いましたが、方言の言語学的解明を少しでも進



写真2 調査の様子

めることが、言語研究者としての自分の仕事と考えていました。

そのような考えでしたので、自分の研究テーマを優先し、話者の方はデータの提供者としか考えてなかつたように思います。そして、そのことに疑問を持つことも無かつたようにも思います。しかし、あるお二人との出会いによって、方言の記録保存や継承についても、自分の課題として考えるよう変化してきました。

お二人との出会い

お一人目は、奥出雲町の糸原正徳さんです。町の教育委員会から紹介されたインフォーマントとしてお会いしました。最初、あいさつことばについて尋ねたところ、「挨拶には、日々の挨拶と、特別な時の挨拶があつて、まず特別な時の挨拶から言いましょ」と、理路整然と説明され、驚嘆しました。その後は、なんでも糸原さんに聞けばわかるということで、頼りっぱなしでした。

何度目かのとき、糸原さんご自身が地元の方言を収集していることを教えてください、図書カード一枚に一語ずつ書いて、五十音順に整理されたものを見せてくださいました。糸原さんは、「方言の温存で伝統文化や人情が永久に残るなどとは思わない。どうせ消滅してしまうものを当時の姿で形として残しておきたいという念願で素人仕事としてやってきた」といわれていました。地域の文化・人情を愛するが故のことばだと思えます。糸原さんは、実に多才で、地域を詠んだ多くの俳句・短歌等があります。地域の変貌や伝統・文化の消滅を惜しむ気持ちたちが方言の収集に向

かったのだと思いました。そこで、糸原さんに、収集された方言の出版をお願いし、当時勤務していた大学の理解を得て、『奥出雲のことば』（溪水社 一九九一）として刊行することができました。

もうお一人は、目次実さん（二〇一七年逝去）です。やはりインフォーマントとしてお会いし、何度もお世話になりました。ある時、目次さんが、地元（八束郡宍道町やつかんしんじちやう、現在は松江市宍道町）で、出雲弁保存会を作って、次の世代に継承していきたくいと言われました。そして、立ち上げられたのが「宍道・出雲弁保存会」です。園遊会・スピーチ大会・講演会を定期的に実施するほか、メディアへの出演等、実に多様な活動で出雲方言をアピールされました。その功績は大変に大きいがあります。

目次さんは、糸原さんと違い、積極的に出雲弁を使い、次の世代に残したいという活動です。それに利用する出雲弁の教科書を作りましたと提案し、出雲弁保存会の皆さんと共同で刊行したのが、『出雲弁検定教科書』（ワンライン社 二〇〇八）です。CDも付けましたが、その音声や会話の収録に全面的に協力していただきました。

方言を記録し今の姿を保存するという糸原さん、地域で出雲弁を継承していこうとする目次さ



写真3 『奥出雲のことば』

んと、取り組み方は違ってても、お二人とも、地域を愛し、その変貌や地域文化の衰退に対する危機感から、方言を記録・保存し、継承していかうとする点は共通しています。

そして、糸原さんが地元の広報誌に連載してきた方言の随筆に地域の方が強い関心を持っていてことや、宍道・出雲弁保存会のイベントに毎回多くの地元の方が集まることなどを通して、地域の人たちの方言に対する関心の高さも知ることになりました。

さらに、一九九三年には、国語審議会が「方言を活用しよう」という答申を出すなど、方言の復権といった時代状況になり、全国的に方言に対する関心が高まりました。一方では、二〇〇〇年代に入り、「危機言語」ということもクローズアップされ、出雲方言でも、記録保存・継承といった動きがさかんになりました。さらに、二〇一一年の東日本大震災が考え方に大きな影響を与えたのは言うまでもありません。

このような中で、言語学的な記述だけでなく、地域の皆さんが大事にしている出雲方言に対して、地域の皆さんのために私自身ができることは何かを考えるようになったのです。



写真4 『出雲弁検定教科書』

出雲方言の記録保存・継承活動

出雲方言の記録保存・継承を目的とした活動は、ますます活発化し、出雲地域全体に、方言に対する関心が高いことも知るようになりました。主だったものを挙げてみます。

個人では、藤岡大拙さんが特筆されます。講演会やケーブルビジョンなどを通じて、精力的に活動しておられ、藤岡さんの話を聞いたことがないという人はごく少ないと思います。藤岡さんは、方言だけでなく、歴史や文化など様々な分野を含んで「出雲学」を提唱しており、出雲方言をそのような広い視野の中で位置づけ、軽妙な語り口で、出雲という地域と方言の密接な関係を説いておられます。

もう一人、奥野栄さんも注目すべき活動を続けておられます。充実した「出雲弁の泉」というホームページを立ち上げたり、一般向けの本を刊行したり、「平田ただもの会」という保存会も立ち上げられました。

個人以外で特筆したいのは、出雲には、現在(二〇一七年十月)、四つの出雲弁保存会があり、それぞれ活発な活動をしていること



写真6 出雲弁保存会一口スピーチの様子(注2)



写真5 講演する藤岡大拙さん(注1)

です。宍道・斐川・平田・松江です。それほど広くはない地域で、隣り合う町にそれぞれ保存会ができており、さらに別の地域でも立ち上げの動きがあります。出雲地域全体に、人々の方言に対する関心の高いことが分かります。

このような活動の中で、自分にできることは、出雲方言のもつ意味や価値を地域の方に伝えることではないかと考えました。例えば、馬鹿者のことを「ダラズ・ダラ」と言いますが、この方言は北陸でも用いられており、日本海側に分布する方言の一つであり、上記の四隅突出型墳丘墓の分布などとともに、日本海文化という大きな枠組みで捉える問題であることなどを伝えたいと考えました。そして、「まつえ市民大学」で、出雲方言を重要なテーマとして、継続して講演会やシンポジウムを開催していこうとしています。

まとめ…課題と提案

上記のように、記録保存や継承活動などがさかんに行われていますが、活動の当事者からは、課題が多いということを聞きます。そのいくつかを挙げておきます。

- ①活動がイベント中心であり、日常の暮らしの中にかける活動とは何か。
- ②活動が、熱心な人だけに限られ、地域全体の活動にはなっていない。
- ③方言に現れる独自の地域性をどこに認めるのか。生活語彙はその可能性が高いが、生活様式自体が消滅・変化している。方言の何を継承するのか

④ズーゾー弁（中舌母音）に出雲の独自性を認めるとしても、その継承は難しい。

⑤すでに高齢者だけになっていく集落もある。特に山間部はどこも似たような状況にあり、継承する相手（若い世代）がない。

それぞれ重い課題であり、これらを一挙に解決するような提案はできませんが、現在、出雲弁保存会の方々と考えているのは、次のようなことです。出雲の文化・生活感情・自然などを象徴するような、「核となる方言・表現」を地域の方に推薦してもらい、ごく限定した数を選定して「中核出雲方言」（仮称）とします。それを地域の方が共有できるよう、教育・マスコミなどを通じてアピールしていきます。

たとえば、「おんぼら」という方言があります。『島根県方言辞典』には、「おんぼらとした天気（おだやかな天気）」「おんぼらと餅が焼けた（焦げず柔らかに焼けた）」の例があります。他にも、「おんぼらとした人（ほのぼのと温かい人）」、「おんぼらとした気持ちで過ぐす（おだやかな気持ちで過ぐす）」などとも言います。この言葉は、出雲の環境・人情・もの言いなどを象徴する言葉と言えらると思います。

このような言葉を選び、さまざまところで意図的に使用したり、教育の場でも取り上げることによって、出雲という



写真7 「平田ただもの会」の皆さんと

地域の文化の核心部分を保存継承していくことができなかと考えています。伝統的出雲方言のすべてを伝承することが理想ではあっても、実現できるかどうか問題です。中核となる方言に限定して、それらを伝承することで、出雲文化の基盤となるものを伝えようとする試みです。

地域社会の伝統・文化が廃れていくことへの危機感は、出雲地方に限らず、大変に強いものがあります。そして、地域文化の核となるのは方言（ことば）だということも、いろいろな所で聞きます。それゆえ方言を記録することの重要性を理解していただけるのですが、それだけでなく、地域文化の継承にどのような役立つことができるかを模索することも、今の研究者が等しく考えるべき課題ではないかと思っています。

注

- 1 <https://mainichi.jp/articles/20170605/ddl/k32/040/263000c> (2017.9.2 アクセス)
- 2 <http://www.asahi.com/articles/photo/AS20170121002346.html> (2017.9.15 アクセス)

地域言語コミュニティと協働する消滅危機言語研究

専門家と協働する言語と文化の継承活動

山田 真寛

六〇〇〇から八〇〇〇あるとされる世界の言語は、その半分が「いま何もしなければ」今世紀になくなってしまおうと言われていきます。そして、そのような「消滅危機言語」が日本には八つあると、UNESCOが報告しています。しかし、島や集落ごとに異なるこれらの言語の下位方言や、日本本土を含むほとんどの地域言語が消滅危機言語と言えます。また、社会の中から言語の多様性が失われることは、特定の地域言語を話す人たちだけの問題ではなく、私たち全員が直面する社会的な問題です。それぞれの地域言語を継承し、言語の多様性を保持していくため、地域言語コミュニティと様々な分野の専門家が協働して行ってきた



これまでの研究・活動を、一つの事例として紹介します。

「言語が消滅する」といふこと

言語が消滅することについて、UNESCOが何か言うよりもずっと昔から伝えられている琉球諸語のことわざがあります。いろいろなバージョンがありますが、私が与那国の人におしえていただいたものはこうでした。

むぬい ばちたや、ちま ばちるん。

ちま ばちたや、うや ばちるん。

ゞことば 忘れれば、島 忘れる。

島 忘れれば、親 忘れる。ゞ

「ちま」は海に囲まれた「島」の意味でも使いますが、ゞ(じぶんの)字、集落、故郷の意味で使うことも多いことばです。「うや」は「親」をあらわすことばですが、このことわざの中ではもっと広い意味で、ゞ先祖や、先祖から伝えられてきたおしえゝのように説明していただいたことがあります。

空気のように当たり前にあると思っていた島のことばを忘れ



てしまうと、そのことばを覚えた故郷のことを忘れてしまう。故郷を忘れると、もっと大切な、親や先祖から伝えられてきたことも忘れてしまう、ということ伝えることわざだと理解していません。

言語は人の「アイデンティティ」

友人が鹿児島県の沖永良部島おきのえらぶしまの人たちに聞かせていただいたお話をもとに書いた小説から、「アイデンティティ」のような常套句を使わずに、言語がそのもの以上の価値を持つということを伝えていと私が考える部分を紹介します。

いしぬ ういに みちや ういてい 石の 上に 土 置いて

みちやぬ ういにはな ういてい 土の 上に 花 植えて

うぬ はなぬ さかば その 花が 咲いたら

わーくわーにくりらー 私の子に あげよう

まわりにいた女の子たちも一緒に唄いだす。つられてトラグワーやヤンバルも唄いだす。みんな、あややみー姉さん 兄さんにこの子守唄を唄ってもらって大きくなったのだ。「子守唄なんだよ、えらぶの」ユキは方言がわからない。戸惑うユキを気の毒に思っ、僕はそつと説明した。「知ってる、この唄」ユキはそうつぶやくと、みんなと声をそろえて唄いだした。(中略)

いつの間にか、ヤマトウから引き揚げてきた、靴を履いた子たちも唄っていた。驚く僕た

ちに、ユキは言った。「お母さんが歌ってくれた唄だよ。」
靴を履いた子たちも、ユキのことばにうなずいた。

—中脇初枝「神に守られた島」『小説現代』二〇一七年九月号 pp.484-85 講談社（改行は本稿執筆者による）

沖永良部島で生まれ育った子もそうでない子も、小さいときに聞いた「えらぶの子守唄」を共有することで、同じ「沖永良部の子ども」としての意識、つまりアイデンティティを持っていると言えることをあらわすエピソードだと思います。

紹介したことわざや小説の一節が示すように、地域言語を継承していくことや言語の多様性を維持することは、言語そのものの以上の価値観の多様性を維持することにもつながると言えるでしょう。

私のこと

私は、地域言語コミュニティの方々と一緒に、中央語（日本語共通語）だけでなく地域言語も話せるバイリンガル話者が育つ環境をつくる、「言語復興の港」というプロジェクトを進めています。言語研究者、作家、デザイナーとともに、言語の記録資料を地域言語コミュニティの人た





ちが楽しみながら使える地域言語コンテンツとして制作し、家庭や地域で使ってもらうための活動を二〇一四年から続けています。「言語復興の港」は、様々な分野の専門家や、これまで制作した地域言語コンテンツ、その制作と利用の経験を、地域言語コミュニティと共有するためのプラットフォームです。

二〇〇五年に大学を卒業し、すぐ行ったアメリカの大学院では「人間が言語を獲得し運用する能力」がどういふものかを解明する理論言語学を研究していました。研究者も一つの言語を獲得し運用して

いる人間の一人なので、究極的には、じぶん一人だけで紙とペンさえあればできる研究でした。大学院ではマレー・インドネシア語の母語話者を教室に招いて疑似フィールドワークをする「フィールド言語学の方法」という授業を毎年取っていました。二〇一〇年に博士号を取得して帰国した際に、本当のフィールドワークをしてみたいと思い、



当時の同僚に誘われて初めて沖縄県の与那国島に行きました。

はじめは当時研究していた複数性という概念に関するデータだけを取って帰る（振り返るとまさに「搾取」と言えるひどい言い方ですが、本当にそう思っていました）つもりでしたが、一緒に行った同僚から「与那国語は誰も全体像を記述していない言語だから、僕はまずそれをやらないといけない」と説得され、数年間文法概説や辞書をつくるための調査研究を続けました。もともと人好きな性格もあり、毎回一か月くらい滞在しては、言語の調査に関係ない地域活動などにもよく参加させていただいたので、言語コンサルタントの方に限らず、親しくしてくださいる島の人も増えていきました。そして、彼らが島のことばを大切に思っていること、それと同時に、消滅危機言語と言われているけれど、具体的にどうすればいいのかわからないことを感じました。

学術研究の地域還元

学問は研究者個人の「わからないことを知りたい」という気持ちで動機にして進められ、それがじぶん一人で紙とペンだけで達成できるなら、社会と直接関わる必要はないかもしれません。また、学術研究の社会還元は、わかったことを専門家向けの論文などのかたちで発表することで、間接的に成しうることもありません。しかし私が行っ



ているフィールド言語学は、地域言語コミュニティの協力がなくては研究データの収集ができません。さらに、彼らのために、彼らの言語を研究する私ができることが確実にあるのに何もしないでいるのは、とても気持ちが悪い感じがします。

与那国に通い始めてからしばらくして、教育委員会の方が講演会を企画してください、島の人たちに向けて私たちがしていることをお話しする機会がありました。そこで「やまだくんがいつも何しに来てるのか初めてわかったよ」と、島の人が言ってくれたのを覚えています。このときから、調査に協力してくださいる方に調査の目的や、研究が目指していることなどをお話しよう心がけています。また、講演会やワークショップを毎年企画し、そのときじぶんができることを探して提供することも続けるようになりました。これが現在の私の言語復興研究のベースになつていると思います。

「学術研究の社会還元」とか、「データ提供者である地域言語コミュニティのために」とか、そういうことを思わないわけではありません。しかし、友だちのように接してくれる島の人たちと一緒に、おもしろがりながらことばの研究をしたいというのが、正直な気持ちです。それで島の人が、じぶんたちのことばに興味を持ちたり、わからないことがわかったり、おもしろがっているうちにいつのまにか消滅危機言語の継承を担っていることになつたらいいなと思っています。ここからは、私が主にフィールドワークを行っている与那国島と沖永良部島の地域言語コミュニティの方々の活動を紹介します。どちらもほんとうにたくさんの方にお世話になつているので、ここでは一部しか紹介できません。

与那国語のこぼれ

教育委員会の村松稔さんには、研究者と島の人たちの橋渡しにご尽力いただいています。教育委員会では沖縄県の一括交付金を活用した事業の一環として、二〇一五年から研究者を一人雇っていたいただいています。同じ事業で島の人も雇用し、研究者が彼らに辞書のつくり方などを指導しています。

村松さんは、島に伝わることわざを利用した与那国語かるた、どうなんむぬいラジオ体操第一のCD、伝統芸能の陰にかくれ記録されてこなかったわらべ唄の採譜など、島の人がおもしろがって使える島のことばのコンテンツを事業の一環としてつくってこられました。去年は私の提案をそのまま聞き入れてくださり、島の若者や、私が一緒に仕事をしていたG K京都のデザイナーとともに、『与那国語会話カード集・簡易語彙集』を、町の事業として制作させてくださいました。

ともすれば事業の成果として「つくrippなし」になりがちなのは、実際に使われなくては形骸化してしまいます。もともと島のことば、特に与那国のような離島のことばのコンテンツ





ことばで書いた道路の看板をつくっているそうです。私が呼びかけて始まったほーげんクラブですが、途中で私が提案した企画を「おもしろくなさそうだからやらない」と正直に言ってくれたことも、看板製作の企画から実行まで彼らだけで進めていることも、とても心強く感じています。町で雇われている研究

年代の若者たちは、はじめは「よなぐにほーげんクラブ」という飲み会仲間でした。1年ほどの試行錯誤期間を経て、「こういうことを与那国語で言いたい」という語彙やフレーズを集め、カードと語彙集にしました。現在は島の

など無いに等しかったなかで、これらのコンテンツを立て続けに制作されただけでも素晴らしいことですが、村松さんは制作したコンテンツをどうやって家庭や地域で使うかということまで考えを巡らせワークショップなどを開かれています。

与那国語会話カード集・簡易語彙集を一緒に制作した私と同





者をうまく活用して、活動を続けてくれればと思っています。
 「言語復興の港」プロジェクトでは、ほーげんクラブのメンバーと、よなぐに幼稚園の先生と、一冊ずつ島のことばの絵本をつくっています。ほーげんクラブのメンバーは最近与那国島に移住した方で与那国語はまったくわからなかったのですが、

私がふだんの会話で使う語彙をまとめたものを彼女と共有し、これを使ったことばあそびを一緒にひねり出し、それぞれに彼女が絵をつけてくれました。よなぐに幼稚園の先生とは、島の民謡をもとにして彼女が創作した方言劇の台本と一緒に与那国語で編集し、分かち書きした単語ごとの訳(簡易グロス)付けや朗読音声の録音なども一緒にしていただきながら、子どもたちも彼らの親も楽しめて、学術的な資料としても利用できる絵本を制作しています。どちらもサンプル段階から読み聞かせなどで使っていたとき、フィードバックを得なが



ら制作しています。

デイラブデイや たぎし くわる たい むてい、
ウデイヤマとう イサや いぐん むてい…
デイラブデイは 竹で 作った たいまつ 持ち
ウデヤマと イサは 鋸 持ち (漁に出かけました。)

—よなくにご絵本『デイラブデイ』より

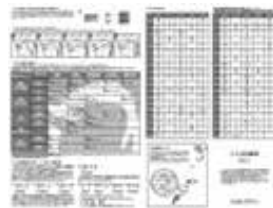
沖永良部島のいっ

沖永良部語国頭方言の文法記述をしている横山晶子（日本学術振興会／国立国語研究所）と二〇一五年に「言語復興の港」プロジェクトを一緒に始めることになり、沖永良部語上平川方言で創作物語を制作されていた松村雪枝さんと知り合いました。当時私は沖永良部語がまったくわからなかったのですが、雪枝さんの希望もあり、物語をできるだけ早く言語復興に役立つものにするため、与那国で少し試していた「島の人がじぶんのことばを記述する力を身につける」というプロジェクトを始めることにしました。物語の作者である雪枝さん本人にその力を身につけてもらうことで、私の知識不足が補われ、一年もかからずに一つめの物語「みちやぬふい（土の声）」を絵本として出版することができました。

絵本の装丁をしたデザイナーの浅川友里江とは、一方的に仕様を決めた発注ではなく、プロジェクトの最初から協働して、雪枝さんの物語が島の人たちにとって最も使いやすいかたちとなるよう考え、親しみやすい絵とともに物語を楽しむ絵本・朗読音声・詳しいことばの解説からなる絵本パッケージとして制作することにしました。

ことばの解説は、伝統的に文字を持たない沖永良部語のため、「琉球諸語のための統一表記法」(『琉球のことばの書き方』くろしお出版)を応用したひらがな表記法を提案し、それを集落ごとの違いも理解しながら自由に使用するための沖永良部語音素体系の解説、さらに物語全文に文意訳だけでなく分かち書きした単語ごとの訳(簡易グロス)を付したものを掲載しました。朗読音声と合わせることで、絵本を楽しむだけでなく、島のことばを学習する際にも利用できて、さらに学術利用も可能な言語資料とすることができました。

このプロジェクトでは、制作途中のサンプルを島の人たちに実際に使ってもらいながら、最も使いやすい形を模索しました。その過程で、手に取れる地域言語コンテンツをまず一つつくることのインパクトも学びました。例えば内城小学校では絵本データを利用して製本ワークショップを行いました。その後内城集落の方がじぶんたちで物語を内城方言で編集して紙芝居を





制作し、子どもたちの敬老会演芸として発表しました。

じぶんのことばを客観的に記述したり人に説明したりする力を身につけた雪枝さんは、絵本を手に島内のさまざまなプロジェクトで指導的な役割を果たしています。「消滅危機言語の復興はコミュニティの主体的かつ継続的な活動が不可欠」という考えを私たちと共有し、雪枝さんは言語・文化の継承の仲間を増やすことにも尽力されています。

私たちが制作中のサンプルを島内で配布して実際に使ってもらったり、絵本を小学校に寄贈したりしたことが合わせて、島の人たち一人ひとりが「じぶんたちのことばと文化はじぶんたちで守る」という気持ちで醸成されていると感じます。

この原稿を提出する直前までフィールドワークをしに行っていた沖永良部では、えらぶ郷土研究会が企画し研究者三名を招待してくださった沖永良部語特集の発表会や、夏休みの自由研究として島の





語復興全体を支える家庭・地域レベルの活動と、私たちが行う学術研究が相互に影響し、螺旋的に発展していることが感じられます。

ことばのコンテンツ制作を呼び掛けた下平川小学校とのディブリーフィングなど、私たち研究者が力になれる場を島の人たちが継続的に提供してくださっています。

「言語復興の港」プロジェクトは、島内の二つの集落の方言で再話した民話を題材にした絵本を現在制作しています。この絵本のサンプルを持って利用プロジェクトを相談しに行ったりゆり保育園は、参観日の活動として行う製本ワークショップを今回してくださいました。言



ゆいぎぬ かみさま、 あざにてい くわーぬ なさゆんとう、
くれー ちきが いかー。
〳〵寄り木の 神様 集落で子が 生まれたから
運命 つけに 行こう〳〵

—おきのえらぶご絵本『ましゅ いっしゅーぬ くれー』より

多様性が認められた社会を目指して

地域言語の研究者は、地域言語の全体像を理解して正確に記述することがしごとです。ここで紹介したようなことは、このような言語の根本的な理解がなくては表面的なものになってしまいます。しかし私たち研究者が一人だけで消滅危機言語の研究ができる期間は、そう長くは続かないと思います。言語以外の研究者や異分野の専門家、地域言語コミュニティと協働することが必要になるでしょう。このような研究は先例がなく、既存の業績評価ではとらえられない時期もあるかもしれません。また地域言語コミュニティの方々と協働で言語の調査を行うことは、言語学的な訓練を提供する段階などはじめのうちは効率が悪く感じること



もあるかもしれませんが。しかし、研究者個人が行う調査とは比較にならないほど将来的には効率がよく、またやりがいも実感できます。

地域言語コミュニティの方々にとっても、言語学や地域文化などの専門家と一緒に、じぶんたちの言語や文化を途切れなく次世代に継承していくことを相談して実践することは、有益だと信じています。外からの視点を知ることと新たに気づくことも多いでしょうし、じぶんたちにとって当然のことを客観的に人に説明する力も身につき、結果的に次世代への継承に役立つこともあると思います。特にここでお話しした地域言語に関しては、すでに効果を実証されつつあると言えます。研究者も地域言語コミュニティも楽しく続けられることをしているうちに、消滅危機言語の研究が進むだけでなく、地域の言語と文化の継承が確実なものになり、言語や文化の多様性が認められた多文化共生社会を維持できると信じています。

「言語復興の港」プロジェクトではここで紹介したメンバーの他に、下地賀代子（沖縄国際大学）、中川奈津子（日本学術振興会／千葉大学）が、それぞれ多良間島と竹富島の民話を題材にした絵本をつくっています。『みぢやぬふい』以外の絵本の作画をしている山本史（京都市立芸術大学・fumiyanamoto.com）は、地域言語を利用したバッジや手ぬぐいなど、地域言語に親しむためのコンテンツも制作しています。「言語復興の港」は、もっと多くの人たちと、人・もの・経験リソースを共有する準備を整えて、お待ちしていますよ。



木部 暢子

所 属 国立国語研究所 副所長／教授
専 門 分 野 日本語学
研究テーマ 日本の方言、音韻・音声、アクセント
著 作 『じゃって方言なおもしろか』(岩波書店、2013年)
『方言学入門』(木部暢子・竹田晃子・田中ゆかり・日高水穂・
三井はるみ(編著)、三省堂、2013年)

菊 秀史

与論民俗村村長
著 作 『与論の言葉(ユンヌフトゥバ)で話そう1～4』(与論民俗村)

原田 誠一郎

自由人

菊 凜太郎

与論民俗村学芸員

白岩 広行

所 属 立正大学 専任講師
専 門 分 野 日本語学
研究テーマ 日本語諸方言の文法、海外日系社会の日本語
著 作 「海外の日本語と方言 ——ブラジル日系社会における東日本出身者たちの西日本方言形使用——」(『方言の研究』1、2015年)
「繫辞生起の方言差」(『日本語文法』16-2、2016年、平塚雄亮・
酒井雅史と共著)

友定 賢治

所 属 県立広島大学 名誉教授
専 門 分 野 日本語学
研究テーマ 中国地方方言の研究
著 作 『奥出雲のことば』(溪水社、1991年)
『日本のことばシリーズ 島根県のことば』(明治書院、2008年)

山田 真寛

所 属 国立国語研究所 特任助教
専 門 分 野 言語学
研究テーマ 消滅危機言語の記述・記録・復興
著 作 『みちやぬ ふい』(松村雪枝・山田真寛・横山(徳永)晶子・元木環・浅川友里江(共著)、言語復興の港、2016年)
「ドゥナン(与那国)語の動詞形態論」(田窪行則・John Whitman・平子達也(編)『琉球諸語と古代日本語—日琉祖語の再建にむけて』、くろしお出版、2016年)

人間文化研究機構広領域連携型基幹研究プロジェクト
「日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築」ブックレット

新しい地域文化研究の可能性を求めて Vol. 3
ことばは文化の源

発行日／2018年2月28日

編 者／木部暢子・麻生玲子

発 行／人間文化研究機構広領域連携型基幹研究プロジェクト

「日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築」

印 刷／株式会社 弘 文 社

新しい地域文化研究の可能性を求めて

Vol.3 2018年2月

■ことばは文化の源

1. 木部 暢子
ことばは文化の源
2. 与論のころみ
 - 菊 秀史
対談1 ユンヌフトゥバを子どもたちに教える
 - 原田 誠一郎
対談2 ユンヌフトゥバで劇をする
 - 菊 凜太郎
対談3 若い世代から見たユンヌフトゥバ
3. 白岩 広行
方言だから伝わることを考えて
4. 友定 賢治
方言で「出雲」を伝える
5. 山田 真寛
地域言語コミュニティと協働する消滅危機言語研究

人間文化研究機構広領域連携型基幹研究プロジェクト
「日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築」

